
繋(つな)いだ手 ~ my hope , your heart ~

ふるーつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋いだ手 〈my hope, your heart〉

【Nコード】

N8026C

【作者名】

ふるーつ

【あらすじ】

パラレル第2弾です。『コーリ国』の姫として暮らすランの前に現れた、コナンと名乗る少年。そしてその後起こる、ある事件。果たしてコナンの正体は？そして、彼の目的は？ 結構な長編になる予定です。

序：その国の名は

その日 周辺諸国に激震が走った。

かねてから各地で反発が起きて不安定になっていたその国の政府は、案外簡単に崩壊した。まあそれも、政府高官のほとんどが、我が身を思つて、素早く身を隠したからだだったが。

そして、蜂起した人々が推挙すいきよしたその国の次の主は、意外にも女だった。才色兼備という言葉を体現したような、理知的なひとりの母親。

そして、それ以来、彼女の唯一人の娘は、『姫』と呼ばれるようになる。

その国の名は、『コーリ』。

序：その国の名は（後書き）

あーやっと投稿できた！って、いきなりすみません。

この話は、前々からあつちを組み立て、こつちを組み立てしていて、結果的にかなり入り組んだ内容になっているような気がします。そして、5話まで保存して、やっと投稿する踏ん切りがついた、かなり思い入れのある話でもあります。

とはいえ、この序章だけでは、何のことやらさっぱりだと思imasuので、とりあえず2、3話やっところと思imasu。気が向いたら読んでみて下さい。

1：名前は？

7年後。

「ラン様、お食事はもうよろしいのですか？」

馴染みの使用人を昼食の残飯とともに下がらせると、ランはため息をついた。……まったく。様づけなんてしなくていいと、いくら言っても無視だ。みんなして。例外もいるにはいるが、彼は使用人じゃないし。

気晴らしに、日課の散歩に出る。敷地内ではないが、その近くに奇跡的に残っている湖へ向かう。「姫」なんていう、くすぐったくてややこしい立場になっても、こういう景色を眺めるのは変わらず好きだった。

元住んでいた家の近くにあった、あの池を思い出させる。まあ、あの頃は必ず連れがいたが。

ふと、湖の畔ほとりに佇む、ひとりの少年に気付いた。どこか、覚えのある後姿。

「ねえ、君……」

振り向いたのは、愛らしい容貌の少年だった。10歳までいってないだろう、どこか懐かしい顔だちの少年。

彼は、何に驚いたのか、言葉を失っていたが、ランがもう一度声をかけると、我にかえったようだった。

「君、こんな所で何してるの？お父さんやお母さんは？」

少年は少し顔をそらすと、短く答えた。

「……いない」

いない？ランは首を傾げた。

ここは国の中枢。政府が力を入れている分野なので、国全土

でも治安は最も整っている。不穏な噂などもほとんど聞かない。
もしかして、7年前の政変で両親を失った子だろうか。あれは、
歴史上珍しいくらい犠牲者の出なかった政府崩壊だし、そのわずかな
孤児にも、ランの母エリがいち早く救済策を出していたのだが。

「いないって 亡くなったの?」

「……」
「ねえ、お家はどこ?」

「……」
「……少年は、何を聞いても答えなかった 唯一つを除いて。」

「名前は?なんていうの?」

「……コナン」

「コナン……君?お家、この近くの?」

「……ない」

コナンは、顔をまったく変えず、妙な返答をした。

「家なんか……ない」

それきり黙ってしまったその少年は、また湖に視線を戻した。

「じゃあさ、……家に来る?」

思い切って提案してみると、コナンは「は?」というように振り
返った。

「あのね、うち、結構広いんだ。それに、コナン君一人ぐらいなら、
世話してくれる人も沢山いるの。お菓子ぐらいは出してあげられる
し」

なんとも複雑な表情になったコナンに、ランはさらに言った。

「どのみち、お家には帰りたくないんでしょ?」

なぜこんなに熱心に勧誘しているのか、ラン自身にもわから
なかった。多分、湖を見つめる瞳が、あまりに『何も無い』ように
見えたからだろう。

コナンは、本当に行く所がなかったらしく、ランが出した手を素

直に取ったのだった。

1：名前は？（後書き）

はい、とりあえずラン登場です。明らかに、主人公ランですね。そして、いきなり怪しげな雰囲気のコナン君。ちなみに、冒頭の『彼は次の回に登場するオリキャラです。今回、オリキャラは彼ぐらいだと思っています。』

この回ですでに、張れるだけの伏線張ってますので、ちゃんと回収できるようにがんばります。

2：身元不明！？

「…それで、連れて帰ってきたって訳？」

「……うん」

コナンの世話を頼むためには、母に会わせない訳にはいかないと、彼女の部屋に連れていった方がいいが……案の定というかなんというか、呆れられた。

「ランさん、どこの子かもわからないのに……ちょっと軽率ですよ。それに、今頃親が捜しまわってるかもしれないし……」

「あ、それはちゃんと話聞いて、ご両親の所に帰そうと思ってね」
アキトにまで突っ込まれ、慌てて弁明する。

彼の父はエリの側近で、彼自身も、ランの数少ない友人のひとりである。

コナンは相変わらず無口で、結局、質問のほとんどに答えなかった。

「とりあえず、この子のご両親のこと、ちょっと調べてあげてくれない？」

家がないなんて言うからには、何か問題があるんだろう。少なくとも、それを解決しなければ、この子は家へ戻れない。ランは連れてくる間に、そう理由づけていた。

「えー!？」

数時間後。ランは仰天した。

「それ、どういう……」

「どうも……さっぱりよ」

コナンの身元を調べたエリの言葉に。

手がかりが、まったくくないのだ。

「つまり、身元がまったくわからないって事。一応、この地域の少年に関わるデータと照合してみたけど、該当する情報はなかったわ」
「……一体、どういう事……?」
「……………」

当惑気味に話すランたちの背中を、コナンは無言で見つめていた。

「身元を特定するものが何もない上に、ご両親の名前もわからないんじゃない。学校に行かせる訳にもいかないわね。もっとしつかり、調べてみなきゃいけないし」

「じゃあ、その間うちで引き取るつよ。どっちみち、放り出す訳にもいかないでしょ?」

ランの口調が、どこか楽しげに聞こえるのは、多分エリの気のせいではないだろう。

「…随分、あの子が気に入ったみたいね」

頬を緩めた母の言葉に、ランは些ちかかホツとして微笑んだ。

「うん、なんか仲良くなれそうなのがしてさ」

彼女に連れてこられてから、にこりもしない、愛嬌も子供らしさも皆無の少年に、どうしてそんな事を予感できるのか。そんな感想をアキトが心中で述べていたとは、知る由もないランだった。

そしてラン自身、コナンに、ある懐かしい面影を無意識に重ねていると気付くのは、もうしばらく先の話になる。

コナンがあてがわれたのは、ランの隣の部屋だった。

「…ここに住むの?」

「そう。嫌なら、別の部屋を用意してもらっけど」

コナンはかぶりをふった。

「…どこでもいいよ」

そう言って、早速部屋の外の風景や机に置かれた花瓶、ベッドのスプリングを見始めたコナンに、ランは少し驚くと同時に、安心し

た。

なんだ、普通の子じゃない。

その夜、ランは夕食を終えると、コナンを部屋へ連れていった。

「どう、お腹ふくれた？」

コナンが僅かに頷く。

「そう。しばらくはここで暮らしてもらおうから、早く慣れるといいわね」

一人で寝られる？という問いにも、やはりわずかに頷いたコナンに、ランは満足げに去っていった。

自分以外誰もいなくなった部屋で、初めて口を開く。

「……第一段階 クリア」

その小さな呟きは、宵闇よじやみに吸い込まれて消えた。

2：身元不明！？（後書き）

ちょっと迷ったけど、やっぱりここまででは投稿しときます。前回の後書が、あまりに思わせぶりすぎる・・・。

補足ですが、ランはちゃんと高校に通っている設定です。そして、ここで説明するのも妙ですが、アキト君はランより、1、2歳年下のつもりで書いてます。いや、本編には関係ないですけどね。

そうそう、登場人物がみんなカタカナなのは、何となくです。うーん…例えていうなら、ポケモンみたいな感覚です。

この話、こうやって後書で補足説明することが増えそう・・・いや、そうしなくて済むよう頑張ります（笑）

3：お父さん

「やはり、何もわからないの？」

「はい……」

アキトの父親、ホーシの報告に、エリはため息をついていた。ランがコナンを拾ってきってから1週間。いくら調べても、彼の情報が入らない。元々、両親の名前も職業も言わないせいで、キーワード自体、極端に少ないのだが。

「…申し訳ありません」

「あなたが謝る事じゃないわ。でも……本当に妙ね」

あまりに、わからなすぎる。ランと出会う前の日まで、どこでどうやって生活していたのか。それすらも推測できない。

「…僕、疑われてるんだね」

コナンも、思う所はあるらしい。ある時、ぼつりと漏らしたその言葉を、ランは確かに聞いた。

館に連れてきた時は、まったく表情を変えなかったコナンだが、相変わらず無口なものの、段々と感情を見せるようになってきた。

「やっぱり、コナン君は悪い子じゃないよ。ね？」

未だに不信感を拭いきれずにいるアキトは、同意を求められて、何とも返答のしようがなかった。

実のところ、とりあえず、孤児らしいと半ば判明しているようなコナンを、自分がなぜ未だに気に入らないのか、彼自身にもよくわからなかった。

1か月が過ぎ、館での生活にすっかり慣れた頃、あまり自分から人に話しかけることのなかったコナンが、散歩中に口を開いた。

「お姉さん……お父さんはいないの？」

ランは、その突然の質問に一瞬目を見開いた。が、一つ息をつく
と、湖を見つめながら答えた。

「……死んじゃったの。もう随分前よ。確か、^{クーデター}政変よりもっと前だ
ったから」

昔から、健康的な生活を送っているとはいえなかった父。しかし、
それでも病気を呼ぶほど不健康でもなかったはずなのに。病魔は容
赦なく、ランから父を奪っていった。

回想するランの横顔を、コナンは見つめた。

「……お父さんのこと、好きだったんだ」

「そうね。……大好きだった」

そして、さりげなくコナンに話題を返す。

「コナン君のお父さんは？どんな人だったの？」

「……」

過去形で尋ねたランの意図に気付いたのかどうなのか、コナンは
静かに口を開いた。

「……絶対勝てない人。いつもは不器用なくせに、僕が困ってたりす
ると、必ず気付くんだ。そういうところが憎たらしかったけど……か
なわない人」

コナンが一度に、これだけ話すのは初めてだった。そして同時に、
彼が両親のことを素直に話した事に、ランは驚いた。

「……どうかしたの？」

ランが話を続けないのが気になったらしく、コナンが尋ねる。

「あ、ううん。コナン君がいっぱい話してくれたから、嬉しくて」

ランがこの時、もう少し頭をひねっていたら、新たな違和感に気
付いたかもしれない。7年前には生まれたばかりで、何も覚え

ていないはずのコナンが、^{クーデター}『政変』について、まったく知らずとし
なかつた事に。

ランは、ずっと思っていたことを提案してみた。

「ねえコナン君、私のこと、名前で呼んでくれない？」

「え？」

コナンは固まった。意表をつく提案だったらしい。

「だって、『お姉さん』なんて、他人行儀じゃない。一緒に住んでるのに。そう思わない？」

「……………」

しばらく言葉を失っていたコナンだが　うろつろと視線を彷徨ひまよわせたあげく、ようやく口を開いた。

「…ラン……姉ちゃん？」

明らかに窺うような言い方に、ランは思わず吹き出した。

「そうそう！これからそう呼んで。ね？」

こうなったランに逆らえる人間は、そうそういないのだった。

3・・・お父さん（後書き）

はい、やっとコナン君が喋りました。やたら無口ですね・・・。

基本的に、キャラの性格やおおまかな関係は、ほとんど原作と同じなんですけどね。（コナンだけ、ちょっとばかりネガティブ思考かも？）

そして、最近気付いたんですが、私が小説を投稿する時、一番悩むのがタイトル。メインタイトルなんか、あれやこれや考えて、すつきり一言にしよう！と決め手からも、やっぱり悩んで・・・。サブタイトルは、こういう長くなりそうな場合、考えるのが面倒なので、もうこの話は、本文から一言二言とっていく事にしました。

そして、4話終わってまだ本題に入れない・・・。まあ次は、ちゃんとそれらしい事だけ喋りますので。

4：打ち切り（前書き）

前話と同じ日の話です。

4：打ち切り

その夜、珍しく夕食の席にエリが同席した。ちなみに、元々が父子家庭な上、父が彼女以上に忙しいアキトは、毎日のように晚餐にお邪魔している。

「コナン君の身元調査、打ち切ったわ」

単刀直入なその言葉に、ランはハツとした。

「実はこの1か月、時間を見つけて調べてただけだね、どうにもめぼしい収穫がないの。これ以上やっても埒らちがあかないから、打ち切ったのよ」

さりげない口調だったが、その報告は、コナンへの不信感を解ききつてはいない、という無言の意思表示でもあった。

当然といえば当然だった。一国のトップしゅつぽうが出自しゅつぽうを探って、まったく手掛かりなしなど、本来ならありえない。

しかし、ランはそうは思わないらしい。頬をふくらませてブツブツ言いながら、食事を進めていた。そして、その様子を見ていたアキトは、わずかに頬を染めた。美人のふくれた顔は、案外可愛らしいものだ。

その夜。

ランの寢室の扉が音もなく開き、小さな影が、中に滑るように入っていく。

影の主　コナンは部屋を横切り、ベッド脇で止まった。

熟睡しているランの頬に、そっと手を触れる。

「……………」

わかっている。自分には、こんな風に彼女に触れる資格など、ない事ぐらい。

……自分がこれからする事が、彼女をどれだけ困らせ、傷つけるかも。

それでも。

コナンはそつと手を離すと、また滑るように部屋を出ていった。

慎重にあたりの気配を調べ、自分の寝室に戻る。

今はまだ、『仕事』を始めるべき時ではないから。

4：打ち切り（後書き）

同じ日の話で、しかもすでに文章はできていたのに、なぜ投稿できなかったのか。我ながら不思議な感じがするのですが、多分、連休で家族がいたからでしょう。この話、まったくしてないからなあ・
・。

この話の読者数を見ると、前のに比べて随分こぶり（表現違うか？）なんですね。そりゃ、キーワードに「国家／民族」なんてありゃ、読む気失せますわな。でも、仕方ないんです。この話には不可欠なキーワードなんです。

…なにはともあれ、ここまで読んで下さっている方に感謝！！ですね。ついでに評価や感想など頂けるともっと嬉しいです。（感想くださいとしつこく書かないせいか、あまり頂くことがないもので）

5：懐かしい夢

彼は家路を急いでいた。今日は、母が家にいる日だと、思い出したから。

いつも忙しい母の久々の手料理が食べられるのは、正直嬉しかった。が、帰るのが遅くなればなるほど、一緒に遊んでいた少女との関係をからかわれるのが嫌だったから、というのが1番の理由だった。彼女の方は、自分の事などまったく意識していないというのに。

家に着く。住み慣れた 懐かしい我が家。

懐かしい？

自分の言葉に首を傾げながら、ドアを開ける。

母は、夕食の支度を始めていた。予想通り、シンちゃんも手伝って、といわれ、渋々ながら、飲み物など用意する。

父を呼びに行こうとすると、珍しく父が自分から、書斎から出てきた。

食事を始めようとして、もうこうやって3人で食べる事もないんだよな と独白する。

あれ？ またしても自分の言葉につっこんだ時、家は一瞬で消えた。

……コナンは目を覚ました。

「夢か……」

呟いてから、苦笑する。 父さんも母さんもいて、あの家に帰ってる時点で気付きそうなもんだよな。

母は既にこの世の人ではないし、父は そこまで考えて、昨日のランの言葉を思い出す。多分、あんな話を聞いたから、懐かしい夢を見たんだろう。

『大好きだった』

……知っている。父を喪^{つしな}った時、ランがどれだけ泣いたか。他人である自分の目には、うだつの上がない、さえない男だった。しかし、ランにとっては、大切な父親だったのだと、思い知らされた。

コナンは、頭をぶんぶん振った。自分の今の立場を考えれば、のんきに7年以上前のことを回想している余裕なんかない。

現に、ランの母親であるエリは、コナンを完全に受け入れてはいない。

その時、部屋のドアが開き、コナンは素早く表情を消した。

「コナン君、起きてる？私、学校に行くけど」

「…送るよ」

ランは数拍おいて、くすくす笑いだした。……自分がどんな顔をしていたのか、考えたくもない……コナンは本気で赤面した。

「じゃあ、留守の間、家の中でも探検しててね。コナン君」

ランに笑顔で言われ、コナンは少しぎこちなくうなずく。

送るといつても、館の出口までで、学校に行っていないコナンはそのままUターンだ。

その時 敷地を囲む木々の間に、とある人影を見つけ、コナンはわずかに目を細めた。

…ここにきてまだ1か月だ。随分早い。

滞在先を確保するためにしても……『仕事』を始める予定時期までかなり間がある事ぐらい、わかっているはず。

……… たく。相変わらず気の早い奴。内心でため息をつくがまあいい。どうせ、様子見のためだろうし。彼は簡単に見つかるよ。うな人間ではない。

そのまま、部屋へ戻る。今日はこれといってやる事もないので、

予定を確認しつつ、使用人たちをやり過ごすだけだ。

館のすぐ近くに住むアキトは、ランの嬉しそうな顔に、朝っぱらからムツとした。

「…今日はまた、ご機嫌ですね」

「あ、わかる？コナン君が、初めて下までついてきてくれてね。」

それより、さん付けしなくていいって言うてるじゃない。まあ…様付けされるよりはマシだけど」

さらっと話題を変えられて、ちよつと拍子抜けしつつ、

「いえ、それは変えられませんが。ランさんがお姫様だっていうのは抜きにしても、年上には変わりないですから」

まじめ腐った顔で断言しつつ、頭の隅で悪態をつく。

そもそもあいつ、ランさんにはかり馴れ馴れしすぎなんだ。

確かに、コナンを拾ったのも、館に置くことを提案したのも彼女だけど……それにしても。

未だに、口はきいても、コナンが感情を表情おもてに出すのは、ほとんど彼女だけなのだ。

(以前、両親がらみで何があったか、知らないけど)

5：懐かしい夢（後書き）

ようやく書けました、コナン目線の話。

いや、コナン目線にすると色々ボロが出そうで、なかなか書けなかつたんです。今からネタバレなんて嫌だし。

ま、何はともあれ、わかりましたね、コナン君の正体（笑）。だって夢の中で「シンちゃん」なんて呼ばれてるし。

ちなみに、この話でチラツと出たのは、私の小説としては初登場の原作ではおなじみの方でございます。ただ、ちゃんと顔やら名前やら出るのは、かなり先になると思いますが。

とはいえ、メインの事件がまだ起こってなくて、これから話をさせたいペアもいっぱいいて・・・長編書くってのは大変ですね。まあ、こんな投稿素人の話ですが、気が向いたら長〜く付き合ってください。下さい。

6：パーティー（前編）

「誕生会？ラン姉ちゃんのか？」

「うん、私の友達だよ。ソノコって行って、割と大きい資産家の子なんだけどね。コナン君に、一度会ってみたっていうから」
その資産のわりに、贅沢に興味のない友人は、毎年の「誕生パーティー」もこぢんまりしたものだった。だからこそ、本来庶民育ちのランとも結構気が合う。

ランに拾われてから半年ほどが過ぎ、コナンもすっかり普通の、明るい少年になっていた。

「うん、行くよ。いつ？」

「実は…明日なんだけどね」

学校にも行かず、毎日館周辺をぶらぶらしているコナン相手だから、こんな急な話もできる。

そういう用事がある時は、時間は早く過ぎるものだ。あつという間に待ちあわせ時間になり、ランはコナンを連れ、途中アキトと合流し、ソノコの家に着した。

「いらっしやい、ラン！準備できてるわよ」

「今日のご馳走様、ソノコ」

「招いて下さってありがとうございます、ソノコさん」

一通りの挨拶の後、彼女の目は、かなり興味深そうに、コナンに向いた。

「この子ね、ランのお気に入り君は。まあ見たところ、そんなに大食いでもなさそうだし、腹いっぱい食べていきなさいね！」

「あ、うん」

令嬢という言葉にあまりにもそぐわしくない挨拶に戸惑いながら、

コナンは応じた。

そもそも、一国の姫であるランを平気で呼び捨てにしている時点で変わっている。　　が、本人にしてみれば、幼い頃からの習慣で、一番しっくりくる呼び方なのである。

会場のダイニングへの通路を歩きながら、ソノコは小さく呟いた。

「…なるほどね、確かに似てるわ」

「え？」

一歩先を歩いていたランは、その声に振り向き、次いで彼女の視線の先にコナンを見つけた。

「あの子。確かに似てるわね……彼に」

「……うん」

かつて、光と影のようにいつも一緒にいた、彼に。

ラン自身、そのことに気付いたのはつい最近だった。

「…どうしたの？ラン姉ちゃん」

歩みの遅いラン達の様子に気付いたコナンの声で、ふたりは気を取り直して会場へ向かった。

そしてパーティーは問題なく始まり、主役であるソノコ本人が考えた企画90%の割合で、進められていった。

6：パーティー（前編）（後書き）

ソノコが登場しました。・・・いえ、実は登場させる予定じゃなかったんですけど、ネタ振りのために。なので、今後も登場するかどうかは全くわかりません。

そうそう、ソノコを登場させる時、いつからの友人にしようか迷いました。ランは、政変の^{クーデター}後、エリにくつついて今の館に引っ越した、という設定でしたので。そうすると、必然的にふたりの付き合いは7年未満・・・というつもりで書いていたのですが、多少なりとも話題かせいこうと思ったら、やっぱり『彼』の話をふらなきゃならぬい。

という訳で、執筆中に急遽変更しました。まあ、引っ越す前の元々の家が、今の館に割りと近くて、交友関係も影響を受けずにすんだ、という事で（笑）

7：パーティー（後編）

帰り道。ふたりは満腹になった腹を半ば引きずるように、館に戻っていた。

「た、…食べ過ぎたね」

「うん……まったく、私たち残飯処理係じゃないっての。私一応お姫様なのに……」

いつも、姫であることを面倒がっているランの言い草に、コナンは苦笑した。

館を囲む木々の間に敷かれた道に、さしかかった時。

「誰？」

不意に、コナンが暗闇に向かって誰何^{すいか}する。

「どうしたの？」

「…あそこに、誰がいるよ」

声に反応して、人影が姿を現した。全身黒づくめだが、手元にキラツと光る銀は おそらくナイフ。

即座に戦闘体勢をとるランを、コナンは素早く庇った。

「コナン君、どいてて！私が」

「だめだよ！こんな暗いのに 教室の稽古じゃないんだよ！」

こんな時間、こんな所にいる時点で、まず間違いなく、殺し屋そんな相手では、多少護身術をやっている程度のランでは、どうしようもない。……コナンの言い分を察したランは、どうすべきかと視線を彷徨^{さまよ}わせた。警備の人間を呼べれば1番だが。

「…先に、中に入ってて」

囁くようなコナンの言葉に、ランは思わず反論した。

「…何言ってるの！そんな……」

「僕が何とかするから。早く！」

その、有無を言わせぬ語気と雰囲気にお圧され、ランはそろそろと戸口に向かう。そして、ランを庇いながらコナンも動き、彼女が扉の向こうに消えた時には、完全に戸を背にしていた。

「……どういつつもりだ？『ハクバ』」

声の主はコナンだった。そして、その声に呼応こたするように、人影はまとっていたフードをほどいた。

「よくわかったね。気付かれないかと思っていただけ」

現れた顔は、いかにも育ちのよさそうな、好青年。

「そりゃわかるよ。動きが、お前そのものだったからな」

……彼が現れてから、今まで3分足らず。しかもその間、ほとんど動いていない。『ハクバ』はさすが、と呟いた。

「で？なんでお前がこっちにいる？親父さんを口説きおとしたのか？」

「……っていう程でもないさ。ただ、ちょっと手伝ってあげようかと思っただけ」

何を、とは彼は言わなかった。コナンも聞かなかった。

コナンは、不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「へー……じゃあオレは、お前の助けがなきゃ、仕事ひとつできねー能無しってわけだ？」

『ハクバ』は苦笑しつつ否定しようとしたが、丁度その時、複数の足音が騒がしく近づいてきた。『ハクバ』は踵かかとを返したが、最後に振り返って問う。

「……いつ始めるんだい？」

「今日」

そのたった一言の返事に、彼は満足そうにフードをかぶり直し、瞬く間に闇に紛れて消えた。

無然とした表情で彼を見送ったコナンは、慌てて警備員を呼び、駆けつけたランに問い詰められると、やっと一息ついた、という体で答えた。

「あの男は!？」

「あの後すぐ、警備の人が通りかかって、追い払ってくれたんだ」
よかった、けがとかしないうで済んで。そう胸をなでおろすコナンに、ランは一安心したのだった。

そして、逆にコナンが尋ねる。

「ああいうこと、よくあったの？」

「え？」

「だから、尾けられたり、襲われたりって。時々あるの？」

「……ほとんどないわ。だからソノコも、誕生会とかに誘ってくれるし」

その後、大捜索が行われたが、なにせ顔がわからないので、『黒装束の刺客』騒ぎは、そのまま立ち消えになった。

そして、騒ぎが何とか収束し、館が寝静まった頃。

自室のベッドから、静かに抜け出したコナンは、窓の外に見える本館を鋭く見据えた。ここは元々、エリが国政を取り仕切る本館に、住居を別館として増築したものだった。

花を挿していない花瓶から何か取り出すと、徐おもむきに操作する。

それが済むと、目を固く閉じ、心と息を落ち着ける。

……迷いは、とつくに断ち切った。

目を開けて、ただ一言、呟いた。

「……始めるか」

7：パーティー（後編）（後書き）

はい、『ハクバ』君登場です。サンデー読者の方なら誰だかわかるだろうと思って、詳しい描写は省きました。ただでさえ、この話、私の小説の1話にしてはかなり長いし、『ハクバ』君は、最後の方まで物語に絡められると思います・・・多分。

ちなみに、どうして名前にずっと『』がついてるのは、その内本編で説明できると思います。

にしても、8話分って、やっと本題出たよ・・・長いなあ。

そうそう、前に後書で人物同士の関係は大体同じって書きましたけど、例外いましたね、ここに。まあ、ちよつと事情があるので、仕方ないんです。他は多分ない、ですね（自信ねーなオイ・・・）。

8：幼馴染み

ガチャツという元気のいい音とともに、ランは勢いよくドアを開けた。

ぎよっとする幼い同居人　　コナンに、これまた元気よく声をかけた。

「コナン君、行こう」

どこへ、なんて今更言う必要もない。日課の散歩にコナンがついて行くようになって、既に数ヶ月たっていた。

ホデイガード「護衛さん、ちゃんと連れて行きなよ？」

そのまま出て行きそうだったランに、コナンが注意する。半
月前の『黒装束の刺客』騒ぎ以来、ランの外出時は常に、ホデイガード護衛が2、3人つくようになっていた。

「あ、ほんとだ。もう、ゆっくり話もできないわね」

ふく膨れっ面になったランに、コナンは苦笑した。……仮にも一国の姫だ。護衛がつく方が普通だろうに。

湖に着くと、畔ほとりに座ってしばらく湖面を見つめていたが、やがてコナンが口を開く。

「……ねえ」

「ん？」

「ずっと聞きたかったんだけど」

コナンは、ランに視線を移した。

「…どうして、僕を拾ったの？」

ランの目が、見開いて止まる。

「だって僕、見も知らない、何も話さない、ただの気味悪い子供だったじゃない。普通なら、近づかないよね？」

……自分が普通ではなかった事に、気付いてはいたのか。妙な感

心をしながら、ランは湖面に視線を戻す。

「…どうしてなのか、自分でもわからなかったよ」

「……？」

「でも、ひと月前ぐらいから、やっとわかったの。…多分、コナン君がアイツに似てたから、かな」

「アイツ……？」

「私の幼馴染み。シンイチっていうんだけどね。コナン君に、よく似てるのよね」

その時、風が突発的に強くなつて、ランは顔を覆った。……もし、そのタイミングが少しずれていたら、ランはコナンの、驚愕と動揺が入り混じった、奇妙な顔が見られただろう。

「……その人、今はいないんだね」

急にうつむいたコナンの様子を少し怪訝けげんに思いながら、

「うん、急に引越しちゃってね。ホントに何も聞いてなかったから、あの時はショックだったよ」

「…引越したって、どこに？」

ランは首を振った。

「わからない。行き先も聞けなかったから。それ以来、音信不通なの。何してるんだらうね、アイツ……」

後半、声が震えてきた事に気付いたコナンは、ゆっくりとランに向き直った。

「…大事な人だったんだ」

ランは、ゆっくりとうなずいた。

「好きだったよ。自分の気持ちに気付いたのは、アイツがいなくなった後だったけどね」

そこでランは、思考を吹き飛ばすように頭をぶんぶん振ると、気を取りなおして、コナンに言った。

「ホントに似てるのよ？コナン君とアイツ。何で気付かなかったん

だろうつて、考えてたんだけど……最近のコナン君見てて、やっとわかったの」

「え？」

「最初に会った時のコナン君、雰囲気があんまりアイツと違ったから。今のコナン君なら、すぐ気付いたと思うけどね」

「……ごめんなさい」

力なく謝るコナン。ランはコナンの頭にぼんぼん手を置いた。

「やーね、謝ることじゃないよ。それより……私も聞いていいかな」「何？」

「……両親のこと」

「……」

コナンは、無言で湖面に視線を戻した。

「亡くなったのよね？」

コナンはしばらく沈黙していたが、わずかに目を細めて答えた。

「死んだよ……母さんは」

予想外の答えだった。

「お父さんは……？」

「……言わなきゃ……だめかな」

「……」

年不相応に眉間に皺しわをつくるコナンに、ランは、それ以上聞くことはできなかった。

8：幼馴染み（後書き）

やっとシンイチの名前が出ましたね。読者様はとっくに知ってただろうに……。

この、ランがコナンの両親の話をぶり返すというネタ（？）は別に抜かしても良かったんですけど、やっぱり使えそうなネタは何でも使わないと、話が進まないんです。なんだかんだで、この話も伏線といえは伏線です。

あと、コナンの回想でしか語られていなかった「お母さんは亡くなっている」という事実を、はっきりさせたっていう意味もあります。

まあ、謎が増えてはいますね。「シンイチが急にどこぞに引越した」理由と、「コナンのお父さん」が今どうしているか。正直に書きますと、お父さん、亡くなってません。むしろピンピンしてます。

相変わらず思わせぶり連発ですが、こんな謎だらけの話を、この後書まで読んで下さった方もしいたら、本当にありがとございます！

9：不意打ち

その夜。コナンは珍しく、ランに我がママを言った。寢室まで、ついで来て欲しいと。

「どうしたの？」

「…あのさ」

コナンは、水平に向けていた目を、ランに向けた。

「…ラン姉ちゃん、無理して笑わないでね」

「え？」

「昼間、シンイチって人の話してた時、すごく寂しそうな瞳してたよっ」

ランの顔が、こわばって止まった。

「…そんなこと、ないよ」

「ううん、そうだよ。子供にはほくわかるもの」

「……っ」

「無理して笑わないでね？僕とふたりの時だけでもいいからさ」
「……」

どうして、この子にはわかってしまうんだろう。

なついてくれるようになってから、辛いときや、泣きたいときには、いつでも彼は心配そうに、自分を見つめていた気がする。

まるで、シンイチのようじ。

(どうして……こんなに似てるの)

深夜。再びベッドから抜け出したコナンは、またしても、花の入っていない花瓶から、何やら拾い出した。

子供の掌にすっぽりと収まるそれを握りしめて、コナンは俯いた。

『好きだったよ』

「……不意打ちだよ」

彼女は、たった一言で、この心を容易く揺さぶる。たやす昔から、何も変わってない。

どうして、あんなことを聞いてしまったのか。『アイツに似てたから』と、言わせたかったのか。彼女がちゃんと自分を覚えていたことを、確かめたかったのか。

ふと、自嘲的な笑みが漏れる。……いつの間に、そんな期待をするようになったのか。彼女が幸せならそれでいいと、ずっと思っていたはずなのに。いっそ、忘れられていても悔やむまいと、心を決めていたはずなのに。

そんな彼女を、自分は。
もう迷わない。乱されない。それ以外の感情に、心を支配されない。そう決めたのに。

後悔はしない。そう決めて、幼児化という道を選んだはずなのに。

……コナンは、ゆっくりと頭を振り、思考を戻した。

『第2保管室』

手早くメッセージを送り、窓から外を見る。数秒で、館の外の暗闇で鈍色の光が一瞬、瞬いた。それを確認し、音をたてずに部屋を出る。

『仕事』は、まだ始まったばかりだ。

9：不意打ち（後書き）

やっと10話分までいきました。

この「不意打ち」というタイトル、実はすごく気に入ってます。ラ
ンにシンイチを好きと言わせて、コナンがこっそり「不意打ちだよ」
と言う話は、連載開始当初から考えていたんですが、そっくりその
まま話につながられて嬉しいです。

あと、この話が原作と大きく違う点の一つが、「シンイチが自らの
意思で幼児化する」という所なんです（シチュエーションの違いは
置いといて）。これは伏せておこうかとも思ってたんですが、書いて
いくうちに、文章の流れで出しちゃいました（笑）

ちなみに、物語の流れとしては決めてあるものの、さしあたって次
の話にまだ着手できていない状態ですので、次の更新はちょっと時
間かかると思います。

10：命日（前書き）

難しい漢字や、初めて出る言葉があります。
本文の下に説明してあります。

「エリ様、ちよつとご相談したい事が……」
そんな歯切れの悪い言い方を疑問に思いながら、エリはホーシの家に向かった。

「すみません。お宅は施政館しせいかんとつながっていて、誰に聞かれるかわからないものですから」

呼び出された時点で、内密な話なのはわかつている。

「余計な気遣いはいいわ。何か問題でも起きたの？」

「……はい」

ホーシは項垂うなだれた。

……その事実を告げられ、エリはすぐさま、全職員に対する身元・経歴の調査を、ホーシに命じたのだった。

「ねえお母さん、もうそろそろいいよね？」

「何が？」

夕食時。ランは唐突に切り出した。

「ボレイガード護衛のこと。あれから、もうひと月たってるんだよ？もうつけなくてもいいじゃない」

「だめよ」

エリは一蹴いちくした。

「今まで、つけてなかった方が異常なの。また襲われたりしたらどうするの？あなたを失うわけにはいかないわ」

「もうないって。ひと月なかったじゃない」

「何かあってからじゃ遅いでしょ？」

議論に熱中して食が進まないランとは対照的に、エリは会話の合間に、器用にぱくぱく食べていく。

「も……………」

「エリさんの言うとおりだよ、ラン姉ちゃん」

それまで黙って食事していたコナンが、手を止めて口を開いた。

「またあんな事があつたら、僕やアキトさんなんか、いてもしょうがないもの。用心しなきゃ」

「コナン君まで……………」

ランは、敗北を悟って頂垂れた。

「…そういえばランさん、もうすぐですよね？」

「そうね……………」

不意にアキトが口を開いた。主語も目的語もまったく不明だが、本人とランと　そしてエリには、何のことかわかつたらしい。

「…何のこと？」

コナンが尋ねる。ランはさっきとは打って変わって、静かに答えた。

「…もうすぐ、お父さんの命日なの」

「……………そうなんだ」

「コナン君も、一緒に行かない？お墓参り」

「え？」

「連れて行くんですか？」

予想はしていたが　すかさず反応したアキトにも、ランは笑顔で応じた。

「うん。コナン君のこと、紹介しようと思ってね。……………いい？コナン君」

8割方自信あり、だが残り2割で窺うかがうような目で見られたら、断りようがない。

「……………いいけど、僕が行っていいかな？」

「もちろん！コナン君はもう、私の弟みたいなものだもん」

「…ありがとう」

照れくさそうに答えるコナンを、エリは「いちへつ」警して、また食事に視

線を戻した。

一蹴・・・あっさりはねつけること。

一瞥・・・ちらっと見ること。

ちなみに施政館とは、エリがいつも仕事をしている、本館のことです。

10：命日（後書き）

やっと事件として動き出しました！何が？と聞かないで下さい。次でわかります。

ここからは、思ってもいなかった事で悩みそうです。まずこの回、エリの敬称で悩みました。大統領とか議長とか、そういう呼び方にしたかったんですが、結局イメージ通りの呼び方がなく、単に「様」付け……。何様だよエリさん（泣）

これからは一層慎重に執筆しますので、本当に更新ゆったりになると思います。

11：誕生日

墓参りの翌日。エリは、報告書を読んで思案していた。

ひと月調査しても、まだ浮かんでこない。少なくとも、職員
の身元・経歴については。となると、調査対象を警備関連や自宅の
使用人に広げるか。

ホーシから受けた報告。

『施政館の情報を、どこかへ漏らしている者がいるようです。
それも内部に』

ホーシが確認したうえでの報告だ。おそらく間違いない。

早く犯人を割り出さなければ、この国は大変なことになる
！

「……………」

そしてエリは、この情報漏洩事案とは別の『嫌な予感』を、胸の
奥に感じていた。

「ねえコナン君、誕生日いつ？」

唐突に切り出された質問に、コナンは面食らった。

「…どうして？」

「だって、普通誕生日って特別じゃない。なのに、コナン君ここに
来てから、そんな素振り全然ないから、いつなのかなって思って」

「…もしかしてラン姉ちゃん、誕生日もうすぐなの？」

さりげなく聞き返すコナンに、ランはギクツと後ずさった。

「……ま、まあね」

「ほんと？おめでとう」

満面の笑みで言うコナンに、ランは照れつつ答えた。

「あ、ありがとう。コナン君が言ってくれと、なんか嬉しいわね」
「そうなんだ？いつかのソノコさんみたいに、誕生会とかやるの？」
「ううん、ケーキぐらいは毎年買ってるけど」
「へー。僕も食べられる？」
「いいわよ。じゃあ、コナン君の好きなケーキ買ってこよっか」
「ほんと？ありがとうー！」
やはり満面の笑みで喜ぶコナン。
ランがうまく話題を逸らされたと気付くのは、1時間ほど後のことになる。

その後、ランは学校に行き、エリも政務で本館の方に行ったので、コナンは自室へ戻った。

「誕生日 か」

……思わぬことを聞かれた。また聞かれたら、とりあえず答えなければならぬ……『コナンの誕生日』を。

『自分の』誕生日を答えるわけにはいかない。今になって、身元の手掛かりを差し出す必要もない。

（ いっそ、『オレがコナンになった日』にでもしておくか）

一休みしてから、コナンは階下を下りた。

「あらコナン君、どうしたの？」

何かやり残した用でもあったのか、そこにいたのはエリだった。

「うん、喉渴いちゃって。……エリさん、どうかしたの？」

「……どうして？」

「だって、すごく疲れた顔してるから」

「……」

咄嗟に言葉を失ったエリに、コナンはたたみかけた。

「仕事も大事だと思うけど、無理しないでね？ラン姉ちゃんも心配しちゃうし」

「…ありがとう、コナン君」

エリは、目の前の少年の頭を優しくなでた。

「君みたいな子供に心配されるようじゃ、私もまだまだね」

コナンは子供扱いされた事に少しムツとした様子だったが、すぐに笑顔に変わった。

「ところで、オレンジジュースあったっけ？」

「さあ……まだあったかしら。見てみないとわからないわね。ごめんなさい」

日夜、政務に追われているエリに、ジュースの残量などわかるわけもない。

「そうだよ。じゃあね、エリさん」

コナンが去ると、エリは持っていた報告書に目を戻しつつ、本館に戻った。

コナンは自室に戻ると、ジュースを机に置き、一息をついた。

さすがに気付かれたか。やはり、若手敏腕トップは伊達じゃない。

さっき、エリが見ていた報告書。チラッと見えたそれに書かれた断片的な情報を、コナンは的確に読み取っていた。

そもそも、さっきジュースが欲しいといって階下に下りたのも、エリが自宅へ戻ってきた気配を感じたからだ。報告書を持ったままだったのは嬉しい誤算だった。

まあいい。多少のズレは予定の範囲内だ。そして、このまま調査が進めば。

事態は、確実に動き出していた。

11:誕生日(後書き)

やっと本題に入れたー!! 本当言うと、もうちょっと時間かかると思ってたんですけどね。

っていうか、最近ネタがあんまり思いつかなくて・・・文章書き始めちゃえば結構すぐなんですけど。

でも、今までみたいにずーっと毎回なんかイベントがあつて、最後でチラッと本題が出るっていうのもつまらないですもんね。ウゝム。

そして、『募参り編』まるまる削除かい! という自分の中の声と闘っておいりましたが・・・そうです削除です。実は1話分書いてはみたのです。でも・・・どーも胡散臭い文章になってしまい・・・スルーしました。

なにはともあれ、ここまで見捨てずに読んで下さってる方(いんのかなあ?)、ありがとございます!

よろしければ、感想など頂けるととっても嬉しいです

12：歌

(バレた、みたいやな？)

『仕事』を終わらせ、帰り際に『彼』は言った。コナンは、ゆっくりと振り向く。

(最近、えらいパスワードがきつうなってるんも……この監視も)

(まあな。けど、その時のためのこの体だ。しばらくはもたせるさ)
闇に紛れての活動なので、話し声もない。ほとんど気配だけの会話だ。

(……そういう問題、ちやうやろ)

彼は、意味ありげにコナンを見る。

(確かに、予定より早い。けど、オレが気に入らんのは……お前や)

(ん？)

(お前が、そないなミスを本気でやりよった、なんてな)

彼の視線が、鋭くコナンを捉える。コナンは苦笑した。

(……やっぱ、お前を選んで正解だったよ)

彼だからこそ、まだ落ち着いていられるのだ。もし『ハクバ』あたりと組んでいたら、いらぬ火花が、あちこちで散っていただろう。

(さ、もう戻れよ、ヘイジ。いや 今は『ハットリ』か)

終始、妙な言葉遣いを貫く『相棒』^{ハットリ}を送り出し、コナンは自室へ戻った。

近頃、ランはいつも同じ歌を歌う、とコナンは思う。

尋ねてみると、謎はあっけなく解けた。

「今度、合唱発表会があるのよ。クラスごとで。コナン君、歌好き？」

コナンは、無言で首をぶんぶん振った。好きとか嫌いとか以前に超苦手。というか、この世になくても一向に構わない。

幸い、言いたいことは雰囲気伝わったらしい。

「そっかー。あ、そうそう。歌っていえば、私小さい時から好きな歌があるんだ。聴いてくれる？」

「……」

拒否したところで、お構いなく歌いだしそうな口調で訊いてくる。仕方なく、コナンは頷いた。

この想いを君に伝えたい

私の小さな胸に、溢れるほどのこの気持ち

辛い答えかもしれない

それでも、きっと私は前に進めるから

でも、忘れないで

告げることだけが愛じゃない

私は、欲張りにはなりたくない

君の笑顔が、私の1番の太陽だから

「昔、誰かが歌ってたのを覚えちゃったんだけど……誰だったかなあ。コナン君にわかるわけないよね？」

コナンは、少し考えて否と答えた。

「…歌は、好きじゃない」

さつき、顔全体で示したことを、改めてぽつりと口にする。

自分が音痴だから、だけではない。歌は……あの女を思い出させるから。

歌は本業ではなかったが、時々、父や自分や友人たちに、綺麗な
歌声を披露していた。

（ 母さん ）

7年前に若くして亡くなった、母を。

12：歌（後書き）

やっぱり時間かかりましたね、彼がでてくるの。

あの関西弁でわかりますね。そうですね、あの方でございます。『ハットリ』君も、『』がついてますね。その説明が、思ってたより後のほうになりそうです。

今回は、当初は考えていなかった、オリジナル要素満開です。ここでヘイジ君を出すつもりはなかったし、歌というのも、自分の体験を元に急遽考えたネタです。

だって、本筋がこんなにゆっくり進むんだから、私のように投稿素人なんかすぐにネタが尽きますよ。まあ、一旦テーマが決まれば、2、3時間で1話書けるんですけどね。なんか考えてるうちに、これまでの話を忘れそうになってます。

13：誕生会

ランの誕生会は、確かにパーティーではなかった。えらく賑やかな晩餐ではあったが……。

「ラン、おめでとー！」

「ランさん、おめでとーございますー！」

「おめでとー、ラン姉ちゃん。…よかったね」

順にソノコ、アキトの台詞である。やや戸惑い気味に、意味不明な祝辞を付け加えたのはコナン。

コナンから見れば、誰が主役かわからない状態なのだ。ランが大人数の席についている横で一番盛り上がっているのは、誰あろうソノコである。

「さあさ、早く食べちゃいましょ。シェフが気合入れて作ってくれたのに、冷めちゃうわよ」

1番冷静なエリが場をとりなし、とりあえず食事が始まる。

「もう、こういう日ぐらい自分で作るって言ったのに」

ふくれるランに、エリが苦笑しながら答えた。

「こういう日ぐらい、あなたは楽しんでなさい。シェフの仕事がなくなっちゃうじゃないの」

元々、家事が嫌いではないランは、夕食もよく自分で作っていた。今現在でさえ、専属シェフの仕事は、毎日ランが持っていく弁当ぐらいなのだ。

そんな会話を尻目に、今日の自分から食をとったら意味がない、とばかりにがつつくのは、やはりソノコであった。

「ソノコさん、太るよ？」

見かねて注意するコナンにも、どこ吹く風。

「いいのよ。いつも腹八分で済ませてるんだから、こういう時ぐらい食べないと痩せちゃうわよ」

「……………」
その場にいた全員がその意見に反対だったが、食事中だったのと、ソノコとわざわざ言い合いしたくないので、あえて誰も突っ込まなかった。

そして、食後のフルーツケーキが運ばれてきた。切り分けるのは、なぜかソノコ。

「1番大きいこれはランのね。2番目のこれ、私もらうわよ」

主役がランであることは、さすがに覚えていたようだが、やはりソノコはソノコだった。

「はい、アンタこれ」

「ああ、ソノコさん、どうも」

「ちよっと、コナン君にもちゃんとあげてよ？」

「わかってるって。はいコレ」

「ああ、ありがとう」

「……………って、ほんとに聞いてた？」

「ああ、いいよ。僕もうお腹いっぱい、あんまり入らないから」

恐らく、ソノコの3分の2ぐらいしかないケーキを受け取り、コナンは苦笑しつつ食べ始めた。

視界の端に、エリの背中を見ながら。

さりげなく騒ぎから離れたエリは、執務室へひとり入った。それを扉の側で待っていたホーシが、続いて入る。

「中間報告です」

渡された資料に、無言で目を通すエリ。

やはり、めぼしい情報はなし。

「引き続き、調査を続けます」

「ええ……………」

返事をしながら、エリは読み進めていく。

「…くれぐれも、漏れのないようにね」

「わかってます」

ホーシを下がらせて、エリは椅子に腰掛けた。沈思黙考する。

調査は進んでいるのに、まったく引つかからない。調べ方が甘いのか、余程用心深い犯人なのか。少なくとも前者ではあるまい。こちらが調査していることに気付いた上で、慎重に犯行を重ねているのなら、相当の曲者だ。

それに。

段々狭まっていく可能性が、なぜか逆にエリの心配を増大させていた。

それはいつかに感じた、『嫌な予感』。

(…何なのかしら、この胸騒ぎ)

13・誕生会（後書き）

なんか、書いてく内に、ソノコが予想以上のキャラになってしまいました。園子ファンの方が怒るのではなからうか・・・（だったら書くな、お前）

あー、もうちょっとキャラを増やさなきゃならない。予定外のキャラはソノコだけのはずだったんですが、もう一人二人増えそうです（ゆくゆくはもっとかも？）

ほんと、長編書くつてのは大変ですねえ。

14・側にいるよ

館を不穏な空気が取り巻いていることに、一部の関係者が気付いてから、3ヶ月。

「職員と警備員の調査、終わりました。不審な報告は、やはり出ません」

「そう。あまりしたくはなかったけど、仕方がないわね……」。

調査対象を、使用人や娘の友人とその関係者に拡大するわ。ここに直接出入りできる人物に限定して。前の調査より人数は少ないから、今回より早く結果が出せるわね？」

「そうですね。すぐに手配を」

「……………ええ」

微妙な間をあけたエリに、ホーシは不審そうに振り返った。

「何か？」

「…いえ、また必要になれば話すわ」

エリの脳裏には、ある少年の姿が浮かんでいたのだ。しかしそれこそ。

まさか、ねえ……………。

胸の奥に膨らんでいく霧もやの正体を、彼女はまだ掴みかねていた。

ランの体調が変だということに真っ先に気付いたのは、コナンだった。

「ねえ、なんかだるそうだよ？熱あるんじゃない？」

「大丈夫大丈夫。ちよっと疲れてるだけよ。ここんどこ、色々あったから」

それはそうだろう、とコナンは思った。

ただでさえ、テストが近づいて睡眠時間が短くなり、プラス例の合唱練習がやけに本格的に進められ、日課の散歩すら途切れていた。その上、護身術の大会が近いからと、これまた休息を削って練習やら筋トレやらしていたのだ。

精神面はともかく、体力面で限界がこない訳がない。

なんとか普通に振る舞おうとはしていたが、さすがに数時間後、心配した使用人のひとりに、ランは強制的にベッドに押し込まれた。「ああ、いいよミドリさん。僕がやるから」
氷枕を用意し、盥たらいに水を持ってきたその使用人に、コナンは言った。

「でも……」

「大丈夫だよ。何かあったら大声で呼ぶからさ」

言いつつ、早速盥たらいに浸けられたタオルを絞りはじめたコナンに、ミドリは苦笑した。

「では、エリ様にご報告してまいりますね」

「ありがとう！」

出て行くミドリに、コナンは笑顔で答えた。

「ごめんね……コナン君」

随分と弱々しくなった声に、コナンは嘆息した。

「…そう思うんなら、早めに休んでほしいんだけどね」

絞ったタオルをランの額に置くと、コナンは静かに言った。

「…ラン姉ちゃん、頑張りすぎなんだよ」

「コナン君……」

「もっと、まわりに甘えてもいいと思うよ」

ランは、目を見張ってから、くすつと笑った。

「それは、コナン君もだよ」

「え？」

「コナン君も、子供らしく甘えること、全然ないじゃない。…」
「両親のこととか、色々あったのかもしれないけど」

「……………」

その言葉に手も止めず、布団をかけ直すコナンに、ランはぽつりと呟いた。

「お母さんは、亡くなったのよね。お父さんと一緒に暮らしたいって思わない？」

「…まったく思わないわけじゃないけど、実際暮らせないから。もう諦めてる」

冷静に答えるコナンに、戸惑いの色はない。……………本当に、そう思っているらしい。

なんだろう。どんな事情があったのだろう。例えば、亡くした妻を忘れ、新しい生活をしようとするこの子を置いていったのか。それとも、罪を犯して一緒にいられない状態なのか。

なんとも言葉が出なくなったランに、コナンは笑った。

「それに僕、今の生活楽しいし。ラン姉ちゃんの側にずっといたいって思ってるから」

「側に……………いてくれる？」

その台詞は、熱で少々弱気になっていたから、出てきたのかもしれない。

「いるよ。僕はいつだって、ラン姉ちゃんの側にいるよ」

その会話を扉一枚挟んで耳にしていたのは、ミドリから事情を聞いて様子を見に来たエリだった。

14：側にいるよ（後書き）

毎回、時間の経過を考えてたら、もー頭がごっちゃになってきます。普通に考えてこれくらいかなー、と推測しつつ書いてるんですが・
・だいたいコーリってどのくらいデカい国なんだか。イメージとしては中東（パキスタンとかイランとか）あたりなんですけど、実際行ったこともないので微妙です・・・。

そして新キャラ・ミドリさん。この人は栗山緑さんです。これから彼女にやってもらおう事を考えたら、他に浮かびませんでした。

にしても、今更気付いたんですが、この話1話読んでも粗筋まったくわからないんですね。私が読者様でも、さぞ読みにくかるう（汗）。

なので、遅れましたが、こんなわかりづらい話を絶賛して頂いた上、評価欄の「出版」項目で「買う」と答えて下さったN様、どーもありがとうございます

15：花瓶（前書き）

2話と3話（序章含め）の後に読んで頂いた方が、わかりやすいと思います。

15：花瓶

『お父さんと一緒に暮らしたくないの？』

『実際暮らせないから』

思えば、父親が死んでいないと言えば、当然出てくる疑問だった。だから、無意識に少しだけ反応してしまった事も、きつと気付かれていない。

「……………」

嘘ではない。ここに来ることは自分の意思だし、それを選択すれば、必然的に父の側にいられなくなる。わかった上で、ただひとりここに来たんだから。

コナンは、ベッドに横になって頭の後ろで手を組み、ベッド横にある花瓶に目を向けた。

最初に部屋に入った時、窓からどれくらい外が見えるか確かめた後、花瓶に目を留めた。そしてすぐさま、あるものの中に潜ませた。次にベッドに目を向けたのは、体重移動でどれくらい軋きしむか調べるため。下手に動いて『仕事』の時、ベッドを抜け出す音で気付かれずには、元も子もなかったから。

花瓶に花は挿さなくていいと言った時には、ランは目を丸くしていた。まだ、ほとんど口を開かなかった時。

挿すなら自分で世話したいけど……………そういうの苦手。花瓶だけいい。

花瓶だけで、部屋の内装としては十分だと言いたかったのを、ランは正確に汲みとってくれた。

…………嘘だ。本当は、空の花瓶があった方がやりやすかっただけ。

夜毎、『彼』に信号を送るための道具を隠すために。

元はと言えば、あの湖で彼女を待ち伏せたことからして計算づくだった。彼女なら、あの懐かしい池に似たここを見つければ、通うようになるだろう。ここで待ってれば、遠からずオレを見つけることになる。そして人の好い彼女なら、孤児らしい少年を素通りすることはできない。必ず館に連れ帰る　計算通りだった。

「ふう……」

もうじき、最低限必要な『仕事』は終わる。『上』がほしがっている情報はほぼ掴んだ。

そして、じきエリがコナンを疑いだす。元々、この年でなければとっくに第一容疑者だ。しばらくその疑惑をそらすための『子供』という盾も、通用しなくなる。

一つ目の勝負は、ランの周囲の人間　特にエリに、自分の存在を馴染ませることだった。

二つ目の勝負は、エリが本格的に自分を疑いだしてから。

15：花瓶（後書き）

最初はもうちょっと進めようかと思っていたんですが、とりあえず2・3話（序章含め）の伏線回収にあてました。

というわけで、ミドリさんに再登場してもらうのは次です。

伏線を張るのはやっぱり難しいですね。というか、張った後の回収が一苦労。実は、この回を書き始めるまで、張った事自体忘れておりました（汗）

ここからは、多分（執筆する上で）前半で1番の山場です・・・。
妄想で作り上げたこの話ですが、この後数話分だけはなかなか喋ってくれないんですよ、（キャラ）誰も。あゝ・・・ちゃんと考えねば。

16：頼み

1週間後、エリは真つ先に調査を済ませたミドリを呼び出した。

「…なんででしょうか？」

彼女に呼び出されるなど滅多にないので、心なしか緊張気味だ。

「実は、あなたに頼みたいことがあるのよ。ちょっと、厄介なこと
なんだけど」

「……？」

そして、数分後。

「頼まれてくれるかしら？」

ミドリは、しばらく言葉を失っていたが、やがて少々青ざめた顔
で、小さく答えた。

「……わかりました」

「そう。ありがとうございます」

頬を緩めたエリに、ミドリは素早く付け加えた。

「失礼ですが、エリ様のためじゃありません。ラン様のためです。

……では、失礼します」

さつさとお辞儀して去るミドリに、エリは無意識に復唱した、

「……ランの、ため……」

自分の頭にずっとわだかまっている霞せむせが、少しだけ晴れたような
気がした。

「久しぶりだね、こうやってゆっくりするの」

「…だって、ラン姉ちゃんずっとバタバタしてたじゃない。ほんと
に、何でもやりすぎだよ」

熱もすっかり下がり、行事もあらかた終わったので、ふたりは久

々に散歩に出ていた。

「でもよかったよ、熱下がって。結構心配してたんだ」

実は翌日、経緯を知ったアキトにも、ものすごい勢いで心配された。彼の気持ちに気付いていないのは、当人であるラン唯一人である。

「…前から思ってたけど、ラン姉ちゃん」

「なに？」

「ここ来ると、ほんとにリラックスした顔になるよね」

「……そうかな？」

別に、館にいると緊張するという訳ではない。仮にも、自分の家だ。が、やはり使用人が絶えず動き、政府関係者が出入りするあの施設やかた館では、無意識に気を張っているのかもしれない。

「そう見えるよ」

「そっか。まあ、ここって気持ちいいし……あそこに似てるし」

「あそこって？」

そう尋ねるコナンの顔には、なぜか含み笑いが混じっている。

「ここに越してくる前の家の傍にも、池があつてね。しょっちゅう水遊びとかかかれんぼとかしてたのよ。アイツは本当に隠れるの上手で、よくバカにされてたわ」

なかなか彼を見つけられなくて、途方に暮れていると、どこからか笑いながら現れたのだ。

オメー、ほんと単純だよな。

そんなシンイチの話をする、父はよくブツブツ文句を言っていた。そして、逆に時々会うシンイチの両親は、ランを本当の娘のようになんか可愛がってくれたものだ。大勢のほう楽しいからと、夕食に招待してくれた事もあった。

特に、彼の母親は有名女優で、彼女に気に入られている事を、ラ

ンは秘かに自慢にしていた。

そんなことを話していると、コナンはいつの間にか口をつぐんでいた。

「…どうしたの？」

「……いや、感謝しなきゃなーって思ってたさ」

「感謝？」

「うん。だって、そのシンイチって人のお陰で、僕こうしていられるんでしょ？」

コナンは、そう言って無邪気に微笑んだ。

もちろん、それだけが理由じゃないことは、わかっているけれど。

夜中、ランは唐突に目を覚ました。

「…あれ？」

今なんか音が……と考えて、それが隣の部屋から聞こえてきたものだと気付いた。

「……コナン君？」

隣は、コナンの部屋だ。

ちよっと気が引けたが、そーっと扉を開けてみる。

すると、布団がめくれ、現在のこの部屋の主がいなくなっている事が、月明かりでもわかった。

(…どうしたんだろ、こんな時間に。トイレかな?)

丁度いいから、自分の用足しもかねてトイレに向かう。いつもなら暗闇はひどく怖いのだが、月明かりの夜は案外、明るいものだった。

結局、行きも帰りも、コナンに会うことはなかった。

16：頼み（後書き）

、あと数話で前半の山場を終わらせたいと思っているのですが、いかんせん自分でも展開がまとまっていけない始末……。いや、展開は決めているのに、細かい道筋を頭の中で整理できていないのです。ちょっと気合入れていこうと思います。

17：網の目

翌日の朝食で、ランは早速切り出した。

「ねえコナン君、昨夜どこに行つてたの？」

その質問に、なぜか背後で控えていたミドリが目を剥いた。当の
コナンは食事の手を止め、怪訝そうにランに目を向けた。

「え？」

「だって昨夜、コナン君の部屋のぞいたけど、いなかったから」

「え？僕ずっと寝てたよ」

「!？」

思わぬ返事に驚くランの横で、コナンはパンをひとつ口に放り込
んだ。

「それって、夜中の話でしょ？寝ぼけてたんじゃない？」

「うーん……」

そういわれれば、そうかもしれない。

「だいたい、なんで僕の部屋のぞいたりしたの？」

「え？確か……そうそう、音がしたのよ」

「どんな？」

「んーとね、何か小さいものが落ちるような音。カタンって」

コナンは、どうでもよさそうに答えた。

「じゃ、やっぱり寝ぼけてたんだよ。昨夜は何も落としたりしてな
いもん。さ、早く食べなきゃ時間きちゃうよ」

支度を済ませ、学校へでかけるランに、コナンはいつも通りの言
葉をかけた。

「行ってらっしゃーい」

「うん、行ってきます」

去っていくランは、自分の背中を見つめるコナンが驚くほど鋭い
目をしていることに、気付かなかった。

「昨夜？」

「はい……」

報告を受けて、エリは顎に手を当てた。

「けれど、ラン様の記憶違いでなければ、妙です。物音が気になつて、見てみたら誰もいない、なんて」

「そうね、無人の部屋で物音がするわけがないわ。………それとも仕組まれている　？」

ふと浮かんだ仮説を、エリは即座に打ち消した。そんなことがあるわけがない。『その人物』なら、今までやってきたことと、まるつきり反対だ。

「…引き続き、お願いね」

「はい。しかし、このままで良いんですか？現に、こうして目こぼしをしてしまっていますし……」

「いいのよ。ずっと見張っていようとすると、どうしても不自然になるから。今優先するべきなのは、網の目を細かくすることじゃない、網に気付かれないことだから。」

本当にあの子がこの件に関わっているのか……確かめるためにね」
常にコナンの近くにあり、さりげなく、その動向を監視できる人物。なおかつ口が堅く、機転がきく　それが、エリがミドリに白羽の矢をたてた理由だった。

「はい……わかりました」

調査が進むにつれて、元々が身元不明だったコナンへの疑惑が増していく。今までその疑惑をかわし、今現在も第一容疑者にはなっていないのは、ただひとつ、そんな高度な真似などできそうにない、コナンの『年齢』のせいだった。

その唯一にして最大の『盾』を、払いのけなければならぬ。

エリは未だ正体のわからない『予感』とともに、それを感じて
いた。

17：網の目（後書き）

エリさんがミドリさんに頼んだのは、コナンの監視でした。まあ、コナン君1日館にいますしね。

さあ、コナン君は何を考えているのか。次ではまだわかりません（オイ）

だって、それがわかったら一気に話が進んじゃうんですもん（笑）

キリよく20話で一区切りつけないと思っっているのですが、なんか微妙です……。

18：信じる

「 問題? 」

「はい、何か深刻な問題のようです。最近、父がよく施政館に泊り込んでいるのも、そのせいみたいで」

高校での休み時間、ランのクラスを訪ねたアキトの用件は、意外なものだった。

ランにも、心当たりがあることはあった。そういえば最近、エリがえらく難しい表情をしている事が多い。仕事が仕事だからと思っていたが、考えてみれば、今までしたことのない深刻そうな顔をよくする。

「…まあ、私たちに話せることなんてあんまりないのかも知れないけど、心配ね」

「はい。……それですね」

「まだ何かあるの? 」

アキトはかなり躊躇った後、重苦しく口を開いた。

「どうやらその問題に、あいつ……コナンが関わっている可能性がある、みたいなんです」

「え! ? 」

目を剥くランに、アキトは上目遣いで続けた。

「エリ様がおっしゃってたのを、偶然聞いてしまいました。あの子が関わっているかどうか確かめるために、監視をつけるって……」。

あいつ、元々が身元不明だから、余計疑われてるんじゃないかと、ブツブツと付け足すアキトに、ランの目がつりあがった。

「何それ! コナン君だって、何か事情があって、家族のこと話せないでいるのに! 」

「何よラン。どうしたの? 」

大層な剣幕で怒りだしたランに、ソノコが寄ってきた。

ランが説明すると、ソノコはそういえば、と答えた。

「極秘に、何か調べてるみたいね。うちも調べられたらしいってパパが言ってたから」

「え!？」

「うちを無断で調べるなんて、相当ヤバイよね。なりふり構わずっていつか」

ソノコの家は国内有数の財閥。政府でさえ、普通当主であるソノコの父くらいには事前通告するものだ。それがまったくの無断つまり、余程極秘なうえに、切羽詰っているという事だ。

「一度聞いてみようとは思ってたんだけど、ランでも知らないなんてねえ」

初耳の驚くべき事実に、ランは呆然とした。

「お母さん、どういうこと?」

学校から帰るなり、単刀直入に問い詰めると、エリはしばらく逡巡^{じゆん}していたが、ひとつため息をついた。同時に、胸の奥がチリツと痛む。

「…4か月前よ、今回の事件が判明したのは」

そしてエリは、『話していい部分』をかいつまんで語った。この情報漏洩事件が、内部の手引きがある可能性が高いこと、調査を進めているが、未だ容疑者が確定していないこと。

「私も、コナン君を疑いたくはないわ。でも、状況からして、調べないわけにはいかないのよ」

そう言っって顔を上げたエリの視線が、ランを通り過ぎて固まった。

「……?」

ランが振り返ると、そこには。
目を見開いた、コナンがいた。

「……コナン……君」

どこから聞いていたのか 数秒間、見開いたまま揺れていた瞳を伏せると、コナンはゆっくりとランたちに背を向け、歩きだした。

「……っ！」

「コナン君！」

咄嗟に二の句が継げないエリ。ランはすぐさま、後を追った。

「コナン君っ！」

二度目の呼びかけで、コナンは足を止めた。

「コナン君……」

「…仕方ないよ」

「え？」

コナンはようやく、ランを振り返った。

「…何も話さない、僕が悪いんだ。怪しいことが起こったら疑われるのは、あたりまえだよ」

「そんなこと……」

コナンはふとランから目をそらし、窓をみつめて呟いた。

「ラン姉ちゃんは……僕を信じてくれるの？」

「信じるわ。あたりまえじゃない！」

それを聞くと、コナンは再びランに目を向け、どこか寂しそうな瞳で、微笑んだ。

「……ありがとう」

18：信じる（後書き）

おし、どーにかここまで来た！

ランに事件がバレて、やっとこの話、進むんです。

にしても、アキト君はほんとに都合のいい所で出てくれます。実は後々コナンと、ランのことで衝突させる相手がほしくて考えたオリキャラなんです、思った以上に役に立ってしてくれます（笑）

予定では、あと3〜4話で一区切りつけるつもりです。

キリよく20話・・・では無理でした。

烈火のごとく怒って帰っていったランを、アキトは当然のごとく見ていた。

エリの気持ちも、わからないではない。コナンは今やすっかり館になじみ、ランに弟のように可愛がられているが、元をたどれば孤児だ。両親が何者だったのか、どういう経緯で独りになったのか、まったく判明していない。

しかし、水面下で起こっている事件の容疑者とは……。

(エリさん、気付いてないのかなあ。あいつが、ランさんを裏切るわけないってこと)

『信じるわ』

嘘じゃない。ランの中には、確かにコナンを信じる心がある。否
信じたい心……かもしれない。

ただ、あの時のコナンの返答と表情に、違和感を感じたのも事実だ。

違和感という表現は、正しくないかもしれない。ランが無意識に期待していた言葉ではなかった、それだけかもしれない。

(あの時、コナン君が言ってくれると思ったのは……)

その違和感が、記憶の底に放っておいた台詞を呼び起こした。

『昨夜はずっと部屋で寝てたよ?』

『何も落したりしてないもん』

何を、考えてるの。あの子はその時、きっぱり否定したじゃ

ない。

でも、今日は……。

急に浮かんだ不安を打ち消すことができず、ランは、自室で思案にくれていた。

エリは執務室で、額を手で覆って自己嫌悪していた。

これだったのだ。ずっと胸にわだかまっていた、『嫌な予感』の正体。

ミドリが頼みを承諾した時の言葉に、靄が晴れた気がした理由。

『ラン様のためです』

彼女は、ランを悲しませたくないから、コナンの監視を引き受けた。エリのコナンへの疑いを晴らしたくて。コナンが何もしていないと、証明したくて。

自分がコナンを疑っていると知った時の、あのランの顔。そして、気付いたら部屋にいたコナンの瞳を見て、すぐさま追いかけたラン。あの顔を、ランにさせることを恐れていたのだ。コナンを疑っていると知られることで。

そう　エリはこの件を知ったまさに最初から、無意識にコナンを容疑者リストの上部に加えていたのだ。

だから、監視を頼む相手に、ミドリを選んだ。　気付かれないように見張るだけなら、いつも一緒にいるランの方が適任だったにも関わらず。

できることなら、ランには知らせず済ませたかった。それは、国の統治者としてではない、母親としてのエリの願い。

「ごめんね……ラン」

彼女以外は無人の部屋に、その呟きは静かに散った。

頭に兆^{きよ}した不安の種を、何とか押し込めようとするランの気配を、コナンは扉越しに読み取っていた。

ミドリがさつきから、柱の影から見ていることにも、気付いていた。

コナンは、エリたちが思っているよりずっと多くの能力をもっている。それだけの訓練を受けているから。生来の感覚の鋭さも手伝って、ミドリのような素人の監視を見破る^{たやす}ぐらい、実は容易い^{たやす}のだった。

ドアから1歩離れ、壁に背中を預けて、ひとつ息をついた。

……信じなくていいよと、言ってしまったかった。オレは、あなた^{あなた}が思っているような、純粹無垢な『子供』じゃないよ、と。

またひとつ息をついて、コナンは自分を抑えた。今は、言うべきではない。決めたことがあるから。

彼女^{ラン}に『最後の言葉』を突きつけなければならぬのは、今じゃないから。

19：心中（後書き）

なんと今回、ほとんど台詞なし。みんなして、回想やら葛藤やらしております。前話で、「やっぱランはコナンを信じるのね」と思われた方、ごめんなさい。

ここまでくると、執筆はむしろ楽です。前みたいに、毎回イベントを考えなくて済むし（笑）

ちなみに予告しておきますと、次の主役はランちゃんです。ま、明るい展開じゃないっていうのはわかりますよね。

20：これが、真実？

花瓶から例の道具を出して、コナンは窓から外を見上げた。いつものような本館や『ハットリ』への合図の位置ではない、空が目に映る。

「……気付いたかな」

誰もいない部屋で、ひとり呟く。

気付いただろうか。オレが用意した、1本の糸に。

彼女に残した、唯一の布石に。

あれから、コナンは何も言ってこなかった。ドアを開く者もいない。

何時間、たっただろう。

ぐるぐると回る思考の中で、ひとつの思いが形作っていた。

確かめたい。

あの子を疑ったままでいたくない。確かめたい。あの子が、

私を裏切るような事はしていないと。

「でも……どうすれば……？」

ふと、エリの言葉が頭を過った。

『4か月前よ、今回の事件が判明したのは』

「……！……！」

ということは、事件それが起こっていたのは、それ以前。

(そういえば……)

『黒装束の刺客』騒ぎは、確かそのあたりだった。

(まさか、あの男　その仲間？)

だとすれば　！

ランは、部屋を飛び出した。

「ああ、あの騒ぎの時のですか？」

「そう。それについての記録、残ってますよね？」

「はい……もちろん」

突然現れた姫に、詰所の警備員は戸惑っていた。

ここには、館の警備に関する全記録が保管されている。国家の機密に関わる文書やデータがある部屋が大部分なため、どんな些細な異常ももれなく報告され、記録として残る。　いわんや、あの時の騒ぎをや、である。

ランはページをめくりながら、背後に控える警備員たちに話しかけた。

「あの時、その男を追い払った本人なら、多少は特徴がわかりますよね？」

「え？」

ランが報告書のあるページを見て顔色を変えたのと、その言葉に警備員たちが首をかしげたのは、ほぼ同時だった。

「……何……これ……」

「いや、その不審者を直接見た者は、いないはずですが」

ランがバツと振り向くと、その速さと顔色に、彼らは1歩後ずさった。

「それ……確かですか？」

「え、ええ。報告書も、そうなってるはずですよ。ラン様が帰ってこられるなり『外に殺し屋がいる！』とおっしゃって、慌てて出てみたら、もう誰もいなくて。他の人間も、皆そう言っていましたから。どうして、絶好の状況で手も出さずに消えたのか、謎でしたよ」

言ってしまうてから、彼は言い過ぎたと思ったらしく口を手を当てたが、ランはそんなもの見てはいなかった。

「……………」
あの時、あの子はなんて言ってた？

『警備の人が通りがかって、追い払ってくれたんだ』

「コナン君……………」

無意識に、呟いていた。

これが、真実？

手が、知らずにかたかたと震えていた。

20：これが、真実？（後書き）

おそらくこの話の最大の伏線が、無事回収できました！そう、あの第7話は、実はこのために考えた話です。まあ『ハクバ』君自身は、元々出すつもりでしたが。

あと1話で前半終わらせようと思っていたんですが、どーも次の話、長くなりそうなので分けようと思います。思わせぶり連発な上、のばしまくりですみません。

21：最後の言葉（前編）

部屋のドアをノックすると、すぐに「何？」と返事があった。

「コナン君？私。……話したいことがあるんだけど、いい？」

「うん、すぐ行くよ」

そう言っつて、コナンが出てくるまでに、なぜか1分近くの間があった。

「お待たせ」

『いつもの笑顔』で出てきたコナンは、

「話、どこでする？」

と聞いてきた。

「あ……」

「じゃ、食堂にしようよ。人いない方がいいでしょ？」

食堂には食事の時間帯以外、ほとんど人影はない。

「う、うん」

やっぱり、気付いているんだろうか。話の内容に。

いつもとまったく変わらないコナンの態度が、逆にランの不安を増大させた。

食堂に入ると、コナンはゆっくりと、しかし過あやたず窓際に進み、並べられた置物を手を取った。くるくる回して眺め、元の位置に戻す。

「…コナン君」

「うん。何？」

コナンは振り返る気配もないが、相槌はうつ。話をする気はあるらしい。

「…半年ぐらい前の、黒ずくめの男のこと覚えてる？」

「うん」

「あの時、警備員を呼んだって言ってたよね？」

「うん。言ったね」

「それは……誰？」

コナンは答えなかった。が、手元は相変わらず置物を手にとつては眺め、戻していく。

「……あの時、人を呼ばなかったの？」

「うん。呼ぶ必要がなかったからね」

「必要……」

「身を守る必要なんか、なかったんだよ」

コナンは、初めて振り向いた。

「だってあいつ、オレの仲間だったんだから」

コナンは、見たことのない顔で微笑んでいた。

当てはめるなら、「ニヒル」という言葉だろうか。まったく別人のような顔。それでいて、声は場違いなくらい明るい声だった。「それを聞いたかつたんでしょ？だから、あんな前のことまで調べて。」

それに オレは『まったく何もしてません』なんて、一言も言っていないよ」

さつきから、コナンの一人称が『僕』でなく『オレ』であることに気付く余裕もなく、ランの心臓が大きく揺れた。

(あの時……それを聞いたかつたのに)

『ありがとう』

そんな言葉じゃなかった。ランが期待したのは 言ってくれると思つたのは、完全な否定の言葉。それさえ言ってくれば、あんなに不安にかられ、わざわざ過去の記録を調べることもしない。

「……私を、裏切つてたの？コナン君……」

コナンは、わずかに目を細めた。

「……違うよ。裏切つたんじゃない」

「え？」

「 最初から、そのつもりで近づいたんだ」

22・最後の言葉（後編）

今度こそ、言葉を失った。心のどこかで、予想はしていたはずなのに。

「最初、から……」

「そう。オレの仕事は、あなたに近づいて施政館（せいせい）に入り込み、信用を得て、情報を流すこと。コーリの外のある所にね。当然、館の外には仲間がいるよ。あの時会った奴は、その一人つてわけ」

そして　　。コナンは一息ついた。

「そして、オレ達の上司がほしがってる情報を手に入れたら、消えていなくなる予定だったんだ。元々、コーリにいないはずの子供だから探しようがないし、すっきり消息不明になるはずだった」

ランは、うまく動かない喉から、言葉をしぼり出した。

「あんな…真似を、コナン君…みたいな子供が？」

「そう、オレみたいな子供である必要があったんだ。疑いの目を、そらすためにね」

事がいずれ発覚することはわかっている。しかし、子供なら疑いはなかなか向かない。実際、エリがコナンに意識的に目を向けるまで、3カ月ほどの間があった。

「…でもコナン君、行く所がなかったって……」

コナンはランの言いたいことを察すると、ああ、と適当そうに相槌をうった。

「さっき言ったでしょ？元々コーリにはいないはずの子供だって。適当な身元を用意することはできたと思うよ。ただ　ここに住むために、孤児である必要があったんだよ」

保護者がいては、帰る家があつては、館（かみ）に住めない。だから、身元の手掛かりになるような事実をまったく語らなかつた。

「まあ、実際にここでいくら身元を調べても、わかる訳ないけどね」
心を閉ざしていたのではない。『存在しない人間』であるという
事実を悟らせないための偽装^{カムフラージュ}だった。

「……じゃあ、最初は無口だったのも、迂闊に何か喋らないように
してたって事……？」

「それだけじゃないけどね」

「え……？」

「心を閉ざしてると思ったら、開きたくなるでしょ？で、時間をか
けて表情を出すようになったら、自分が心を開いたと思って安心す
るし、信頼するでしょ？……オレがここに住むには、あなたがそれ
を希望する事が1番の早道だったからさ。」

まあ、あなたに気に入られるって意味では、シンイチって人に感
謝しなきゃね」

「えっ……？」

突然出てきた名前に、ランは無意識に反応した。コナンは、さっ
きと同じ顔で、やっぱり微笑^{わら}っている。

「前に言ってたじゃない。『シンイチに似てたから』オレを拾った
って。おかげで、あなたの周りの人に、オレの存在を定着させるの
が予定より早くできたからね。ま、会ったこともないけど」

最後の一言では、どうでもよさそうな口調になっていた。

ランは、必死に考えていた。何か忘れている。そう、とても大切
な、何か！

「でも、言ってくれたじゃない！『側にいる』って。ずっと側
にいてって……」

「ああ」

今しがた思い出した、といった相槌だった。コナンは皮肉っぽい
瞳をランに向けた。

「あんなの、本気にしてたんだ？」

あの時のコナンの顔が、なぜかかぶる。ランは、今度こそ息を忘れた。そう思った。

「さてと」

言うのが早いか、コナンはいつの間にか開けていた窓の、窓枠に飛び乗った。

「コ、コナン君！？何するの？」

慌てて窓に近づくとランに、半分だけ振りむいてコナンは答える。

「正体がばれた間諜が、いつまでも敵地にとどまると思う？」

間諜スパイ　ランは身を強張らせた。そう、彼のしたことは、確かにスパイだ。

コナンは最後にひとつクスツと笑い、

「『バイバイ』」

そして、その少年は、施政館やかたから姿を消した。

22：最後の言葉（後編）（後書き）

間諜「かんちょう」・・・ずばりスパイという意味です。

前の話で、「まだ書きやすい」とか言っていました。が、甘かったです。この回は、逆に話題がいっぱいありすぎて、まとめるのに一苦労しました。ああ、まだ言わせたい台詞があったのに・・・でも、これ以上つめこむと文章がもっとブチ切れになってしまふと思い、断念しました（泣）

前後編にして、ちょっと短めで済むかな？と思ってたら、これもとんでもないですね。長くなりました。

評価を送って下さった方々、すごく嬉しいです。ありがとうございます！

23：最後の仕事

彼は、こともなげに目の前に佇たたずんでいるコナンにため息をついた。

「……お前なあ。どうせえっちゅうねん」

「悩む必要があるか？するだけだろ、お前の仕事を」

ここは『ハットリ』の潜伏先。外からコナンを補助していた彼の仕事は『連絡役』。コナンから送られた情報は、彼を経由して『上司』のもとに送られていた。

やはりこともなげに返すコナンに、彼はまたため息をついた。

「……あんなあ、考えとる事があんなえやったら、ちゃんと話さんかい。予定がめっちゃ狂つとるやないか」

「ちよつと計算外が続いただけだよ。それに、仕事は9割方済んでる。大した事じゃない」

すまして返すコナンに、彼は顔つきを変えた。

仕事は9割方済んでいる。それは事実だ。しかし、残りの1割に、もうひとつ重大な役目があったことを彼は知っている。とんでもなく『大した事』だ。

そして、それはコナンには、ある意味いつでもできる仕事。

「……お前、やつぱり知り合いやったんやな。あの姫と」

コナンは、意味ありげに微笑んだ。

「だったらどうする？ 『上』に報告するか？ 『ハットリ』」

「やめ、そない他人行儀な呼び方」

「いや、『ハットリ』だ」

「……………」

言葉に詰まる彼。

「ここに在る限り、お前の名は『ハットリ』だよ。そうだろ？」
鋭い視線を向けられ、彼は少し顔をそらした。

『ハットリ』は、彼の本名ではない。本名はヘイジ。『ハットリ』は、仲間内で呼び合うための、いわばコードネームだ。

そして『コナン』もまた、本名ではない。本名はシンイチ。『コナン』は彼のコードネームであると同時に、今回の計画名でもあった。

「ま、どのみち今日の件は『上』に知れる。『ハクバ』がまだここにどまつてる可能性も、なくはないしな」

この名前に、ヘイジは目を剥いた。『ハクバ』も同様、本名ではなくコードネームだ。

「何！？あいつ来とるんか？会ったんかお前！」

これには、コナンが少し驚いた。

「ああ、初日にな。わざわざ不審者になって会いに来たよ。本人は、手伝いに一役かったつもりらしいがな」

ランの信用を得るための。だから彼は、殺し屋に扮した。コナンが彼女を庇うことで、より信頼され、仕事がやりやすくなるように……まあ、殺人の技術という点では、あながち間違っではないが。

「あいつ相手にしろ、今のオレならみすみす殺らせたりしねえけど。それとも……命令違反で、お前がオレを殺すか？」
恐ろしい文句を、口許に笑みを浮かべて言う。

ヘイジも、殺し屋並みの殺人術をもっている。任務の妨害者を排除するため。それに時には、暗殺を命じられることだってある。

それは、コナンも同様だった。コナンの場合、体が小さい分、より早く動ける訓練も受けている。

ヘイジは確信した。コナンには、何か絶対に叶えたい望みがあるのだと。それも、あの姫に関する。そしてそのために、『ハツトリ』と殺し合うことも、敢えて避けるつもりはないのだと。だから、前々から命じられて知っていながら、最後の仕事を放棄した。

姫^{ラン}を殺すという、その仕事を。

ヘイジは、ひとつ息をついた。

「……アホぬかせ。オレに、お前を殺すなんちゅう真似、できる訳あるかい」

7年来の親友だ。元々、『上司』への忠誠心も、ヘイジにはさほどない。彼からの命令など、目の前にいるこの少年の命と比べるのもバカバカしいのだ。

ヘイジの言葉に、コナンは微かに笑った。そして彼に背を向けると、扉に手をかけた。

「どこ行くねん？シンイチ」

「シンイチじゃねーよ」

コナンは、半分だけ振り返った。

「オレはコナンだ。シンイチじゃない。シンイチは死んだんだよ、あの時。あの薬を飲んだ時にな」

全てを捨て、ただひとつの望みのために、コリーに来ると決めたあの時に。

23・最後の仕事（後書き）

もうちょっとコンパクトに収めるつもりだったんですが、なにせ説明しなきゃいけない部分が多くて、長くなりました。

つか、ここまで気を遣って書いたの初めてです。喋らせる台詞を一言間違つと、話が脱線するのです。

元はといえば、愛犬の散歩中にふと、「コナンが蘭を裏切る話なんてありうるかな？」と思ったのが発端でした。そこから、キャラの性格を残しつつストーリーを組み立ててみたら、このようなパラレルに。妄想頭だなあ、我ながら。

そうそう、ここへきて評価を送って下さる方が増えており、読むたびに感激しています。

ありがとうございます！！

24：仕掛けた布石

『隠れ家』を出て少し歩き、手近な木にもたれて、コナンは俯いて目を閉じた。

本当は、計算違いなんて何も起こっていない。全て、コナンが思い描いたとおりに事は進んでいる。

最初に、情報を流している内通者スパイがいるとエリに感づかせた『ミス』もそう。もっとも、あれは様子見だったが。

内部調査を始めたのを見越して、その網をかいくぐって『仕事』を続けることで、職員や警備員らを容疑者から外した。さすがに、使用人を使って自分を監視させるとは予想外だったが、ミドリ一人の動きぐらい、大した要素ではなかった。

そして、その事実をランに知らせること。実は、エリからランに「コナンの動向に気をつけろ」とでも言わせるつもりだったが、そこは結果オーライだった。

そして徐々に、ランに自分を疑わせた。夜中に仕掛けをして部屋を抜け出し、無人の部屋で物が落ちる小細工までして。

……あの時、完全否定しなかったのもそう。あそこで無実だと言えれば、ランはそれを信じてしまう。それではダメだったのだ。

仕事初日の『ハクバ』の一件は、ずっと探していた決定打として利用した。

夜中、館内を動きまわっていたコナンなら、警備の記録を書き換えるなんてわけもない。それを狙って『ハクバ』はあそこに現れたんだろっが、コナンはそれを放置することで、ランへの布石にした。

ランが本気でコナンに不信感を抱かなければ、あれまで調べることはない。そして、あれを見れば疑惑は決定的なものになる。ランが今回の事件と、あの時の遭遇を結びつけて思いつくかどうかだけが賭だったが、彼女は無事それをクリアした。

全ては、ランに『コナン』を疑わせ、問い詰めさせるための仕掛けだった。

『コナン』を追い詰めるのは、彼女でなければならなかったから。

……そして。コナンは顔を上げた。少し雲がかかった空。一般的にはまだ「晴れ」と表現されるだろう。

(……まだ、整理できねーかな)

まだ、シヨックから立ち直ることはできないかもしれない。でも、心配はしていない。彼女には、頼ることができる人が何人もいる。

片親を喪つても、まだ余りある愛情を注いでくれる母親が。いつだって、何の臆面もなく、接することができる親友が。

そして、自分と似た眼差しをランに向けていた、年下の少年が。

オレを、憎むだろうか。

それでいい。憎まれるために、あそこまで傷つけたんだから。オレ達は、敵対するべき関係にあるのだから。

オレが………それを選んだんだから。

24：仕掛けた布石（後書き）

今更ですが、謎をちりばめすぎて半ば後悔しております。個々の謎に対する答えはちゃんとあるものの、それをうまく物語の中で説明できるという自信がありません……。うう、頑張らねば。

次は、ちょっと過去の話にして、前半を終わる予定です。

ここで悩んでいるのですが、後半を始める前に、粗筋を入れた方がいいものか……。よろしければ、読者様のご希望を教えてください。後書まで読んで下さる方々のご意見ですので、ぜひ反映させて頂きます。

ちなみに、ご要望がなければ、多分入れません。

25・回顧（父と息子）（前書き）

回顧（かいこ）・・・過去をかえりみること。

25：回顧（父と息子）

あの時から、望みはたった一つだった。

遠く離れてから何年もたつにも関わらず、この心を抑え続ける彼女を、守ることが。

……何より、許せなかった。

誰も傷つけたことも、苦しめたこともない、誰より優しい彼女を自分の1番大切な人を、醜い方法で傷つけることを。ペンヤノートを使うように彼女を利用し、飽きた人形でも捨てるように殺そうとする、あいつらを。

だから決めた。自分の手で、大切な彼女を守ることを。

例えそれが、自分が彼女を傷つける存在でしかなくなる道であつても。

「…つざけんな!!」

最初にその話を聞いたときは、久しぶりに激昂げつこうした。

そして その次の父の台詞に、危うく我を忘れそうになった。

「お前が適任だと思つんだ。やってみる気はないか？」

「…んだよそれ!? オレに、この手でアイツを傷つけるつてのか? 殺せつてのか!? どうかのオヤジの下らねえ権力欲のために? ……どうかしちまつたのかよ父さん!？」

直属の上司への罵詈雑言にも、涼しい顔だ。

「ああ、彼のことは、この際どうでもいい。問題は、お前にこの仕事をやる気があるかないか、だ」

その些ちひか妙な言い回しに、シンイチはやっと、冷静さを少し取り戻した。

「…オレにしか、できねー事……つて事か？」

「いや、そうでもない。ただ お前でなければ、彼女は間違いな

く、最後には殺されるな」

その言葉に、ぞっとした。アイツが死ぬ?…そんなバカな。

「今の彼女には、それだけの危険がある。お前ならわかるだろう?」

「……」

ユーサクは座っていた椅子から立ち、窓の外を眺めながら続けた。
「今回の計画では、コーリに実際行くのは、実行役と連絡役の二人
そして、彼女にもっとも近づき、最後に『処理』するのは……実行
役だな」

「……」

「そして、『処理』の判断は、今のところ実行役に任されている。

……この意味がわかるな?」

実行役になれば、『仕事をし続けること』と引き換えに、できる
限り長く彼女を生かすことができる ユーサクは、暗にそう言っ
ているのだ。

「……けど、それじゃ時間を稼ぐだけだ。半永久的にアイツを逃す
ことは、できねーよな?」

「ああ、その通りだ」

その父の横顔に、シンイチは仕事とは違う何かを感じた。

「…何か、別の策でもあるのかよ?」

「……」

ユーサクは、静かに息をついた。

「…実は、ずっとお前に話していなかった事が、もうひとつある」

その後 父の口から出たその名前に、シンイチは少なからぬ衝
撃を受けたのだった。

25・回顧（父と息子）（後書き）

ついにこの話を載せる時が来ました。

文章自体は大分前に書いたんですが、ハテどこに入れようか？と考
えた末、多少話がわかってきただろうこの辺に入れることを決めま
した。

次、もう1話回想にして、後半に入りたいと思います。

26：回顧く相棒く

「まさかお前が、わざわざこない面倒な役やりたいて言い出すとは、思わへんかったわ」

どこの訛りなまなのか、6年つきあってもまったく言葉遣いの変わらない友人は、心底不思議そうに言った。

「……そうだな」

「なあ？お前この仕事興味ないどころか、軽蔑しとるて思ってたで？」

シンイチは苦笑する。 事実だった。

あんな、人を傷つけることしかしないような組織に、なぜ父がわざわざ入り、拳句あけく居続けるのか……まったく疑問だった。

そもそも6年半前、母の死後すぐに、自分を引きずるようにコーリを離れ、このシャナンに移り住んだことからして疑問だった。

まるで、その後まもなくシャナンが国交をほぼ断絶し、クーリで『政変クーデター』が起こり、旧政府が倒れることを、予期していたかのよう
に。

もっとも、それを聞かれた父は笑って答えたが。

『いくら俺でも、そこまではわからないさ。まあ、エリさんが統治者として立った時点で、彼女ランさんが狙われる可能性は考えていたがな』

「まあ、オレは半年もいらんて思てるけど、あのオヤジの方針やさかい、我慢しいや」

「構わねーよ。どのみち、親父の推薦で認められたオレを信頼してない奴はいる。そのくらいは従っておくさ」

些細な事だった。父の望みと　そして、自分の望みを叶えられることを思えば。

元々、組織の正規メンバーではないシンイチの、実行役への志願に、ユーサクの上司は渋い顔をしたらしい。それでも諒解りょうかいしたのは、メンバー入り6年、お気に入りになったユーサクの推薦だったからだ。

しかし、そういう仕事を無経験のシンイチにさせるのは無謀。そこで上司が課した条件が、『半年間の訓練』だった。これでさえ、まだ16歳の少年には破格の条件だ。

「けど　ホンマにええんか？下手したら殺されるかもしれんねんで？」

「その時はその時だ、何か考えるよ……少なくとも、死ぬつもりはない」

彼は、シンイチをじっと見つめていたが、ふと、何か思いついたように言った。

「…そない言うたらお前、昔コーリに住んどったんやったな」

「ん？……ああ」

「もしかして、例の姫と知り合いやったんか？」

シンイチは、口許だけで笑った。

「さあ……どうだかな」

彼はじつとシンイチを見つめていたが、やがて息をひとつついた。「…ま、ええわ。大事なのは、お前ときっちり仕事終わらせて無事に帰ってくる事やさかいな」

「そうそう。頼りにしてるぜ、連絡あしほづ役さん？」

シンイチは、自らが連絡役として選んだ男　ヘイジと顔を見合わせ、ニツと笑った。

ポケットに、始まりとなる錠剤をひとつ忍ばせて。

どこで歯車が狂ったのかと、何度も考えた。

しかし気付いてみれば、実際は何も狂ってなんかいなかった。運

命とやらは、随分遠回りしてその齒車にたどりついたシンイチを、
快く受け入れたのだ。

来るべきその時に、1番大切な女性^{ひと}を、守りぬくために。

26・回顧く相棒く（後書き）

これで、前半終了です。後半はラン側メインになるんじゃないかと
（いや、前半もそうか）

ただ、白状しますと、ものすごく大まかな展開しか考えてませんの
で、ちょっと時間かかるかも。
そして。ユースクさん、もう出てこない可能性が……。出て欲しい
んですけどね。いや、出すのは私か。

27: いつも通り

「行ってらっしゃい」

「うん。行ってきます」

ここ数日、珍しく見送りに出ている母に応え、ランは学校に出かけた。……実は、娘を心配して何とか時間を割いているのだが。気付いているのだろうか。

「…エリ様」

「ああ……ミドリさん」

声をかけてきたミドリと、エリはランが出ていった方を見つめた。

「…私の、ミスなんでしょうか……」

「違うわ」

落ち込んだようなミドリの台詞を、エリは即座に否定した。

「言うなれば、私のミスよ。子供と侮って、コナン君の動きに気付けなかった。そして……あの子を抑えることもできなかったんだから」

ランが自分で確かめるべき理由など、何もなかったのに。待つていれば、いずれ結論は出たはずなのに。それでも、確かめずにはいられなかったのは、それだけコナンを信頼していたから。

コナンを信じたかったから。

「とりあえず、しっかり見ててあげてね、あの子のこと」

「はい」

決然とした表情でうなづくミドリに少し頬をゆるめ、エリは仕事に戻った。

あの事件は、まだ何も解決していないのだ。

コナンは、自分がしたことは語ったらしいが、肝心なことを一切語らず姿を消した。

そもそもコナンに潜入仕事を命じた、彼の上司のことを、何も、それを何とかして突き止めなければ、この件は終わらないのだ。

アキトがランのクラスを訪ねることはよくあったので、別段驚きはしなかった。しかし、状況が状況なので、いつもの挨拶もどこかぎこちなかった。

「…あいつ、だったそうですね」

「うん。アキト君の言ったとおりだったね。ごめんね、怒鳴ったりして」

表情も口調も、『いつも通り』を意識しているのがわかって、アキトは言葉が続かなかった。1年近くの間、心から信頼していた少年が、突然いなくなる心境……。

しばしの沈黙の後、アキトはやつと言葉を捻り出した。

「あの、元気出して下さい！僕はいつでも、ランさんの味方ですから！」

この台詞だけで、スルドイ人間なら彼の気持ちに気付くだろう。が、生憎ランはその手の感性が極端に薄く、それを理解できる余裕もなかった。

「…ありがとう。じゃあね」

教室に戻っていくランの背中を見ながら、アキトは小さく齒軋りした。

「……………くそ……………っ！」

28：家族のように、弟のように

学校から帰り、自室にこもると、ランはベッドに座ったまま微動だにしなかった。

あの日から、ともすれば視界にあの小さな姿を探し、ちょっとした事で、あの幼い声を期待している。

まるで、あの日に突きつけられた事実を、嘘にしたいかのように。

『ラン姉ちゃん』

独りになれば、頭の中を渦巻くのは、喪失感。そして、疑問符。

『側にいるよ』

どうして。どうして。どうして。

ランだって、自分の立場はわかっている。『姫』となつてからは、見知らぬ人間には近づかなかったし、下心をもって近づいてきたと気付いた人間を、何人も突き放してきた。姫という立場には、望まない側面が多かった。『政変』^{クーデター}から7年間で、人を見る目は相当養つてきたと思つている。観察眼なら、普通の17歳の女の子よりはあるつもりだった。

コナンを拾ったのは、最初は本当に、ただのおせっかいだった。子供だからという安心感もあったし、コナンが幼い頃のシンイチに酷似していたから、放っておけなかったというのもあった。少なくとも、コナンが感情を出すようになるまでの数ヶ月は。

しかし、それからは本当の家族のように……弟のように思っていた。あの子も、そう思ってくれていると思つていた。あの子が自分

に向けてくれた目は、そういう目だった。利用するだけの相手を見る目なんかじゃなかった。決して。

だから、信じていた。あの記録を調べた後でさえ、信じたいと思っていた。…全て話して、「ごめんなさい」と言ってくれれば、母エリにとりなして多少でも良い状況にするつもりだった。

『あんなの、本気にしてたんだ？』

……あんな目で、あんなことを言うなんて。

「シンイチ……」

ふと、口をついて出た名前。

彼は今、どこにいるんだろう。

どうしているんだろう。

28・家族のように、弟のように（後書き）

珍しく間があいた割に、進んでませんねえ。はは。

実はこの話にも、前々から考えていた設定（っていうか、ネタ？）がひとつ入っているので、本文でうまく話題にできるようがんばります。

次は少くしばかり展開しますので、お楽しみに（？）

あれからずっと気がふさいでいたので、散歩も途切れがちだった。久しぶりにあそこへ行こうと、とりあえず護衛ボディガードに声をかけた。

彼らは怪訝な顔をしていた。あそこは、コナンに出会ったそもそも場所だから。

「でも、その前から日課だったし。あんまり行かないと、それこそ調子が狂うのよ」

そう言っつて護衛を口説き落とし、ランは湖に出かけた。

到着すると、いつもの場所に腰を下ろす。

『リラックスした顔になるよね』

辛くないといえば、嘘になる。まだ、消化できていない。

ただ、もう1度会いたい。会って、真意を聞きたい。……ランは、無言で湖面を見つめた。

その時。

パシユツ、という小さな音がどこからか聞こえた。そして、それと重なるように、キーンという金属音が響いた。

「え……！？」

素早く、護衛ボディガードたちがランの周囲を囲み、警戒態勢をとる。

護衛たちの背中の隙間から、かろうじて周囲を見回したランは、10メートルほど離れた木立の影から、ひとりの青年がわずかに姿を現したことに気付いた。

「あ、あなた……は」

言葉が途切れたのは、遠目にも彼が怒っていることがわかったからだ。しかし、彼はランを見てはいなかった。

「なぜだ……！」

その視線を追ったランは、思わず声をあげた。

「コナン君!？」

ランから5メートルほど離れた木の枝に、鉄棒にでも乗るかのよう
にコナンが腰掛けていたのだ。手には、何か金属片のようなもの
がある。

コナンは、表情の読み取れない瞳をチラッとランに向けると、ま
た青年に目を戻した。

「なぜ裏切った!よりによって君が…!」

「なぜ……ねえ」

コナンは無邪気ささえ感じさせる目で、口許に笑みを浮かべて言
った。

「オレは最初から、こうするつもりだったぜ?」

「え……………?」

ランが怪訝な声を出したのと同様に、青年も理解できないという
顔をした。

「それは……………」

どういつ事だ、と問い詰めようとしたようだが、護衛のひとりが
施政館と連絡をとった事に気付いたらしく、青年は素早く木立の影
に隠れると、完全に気配を消した。

ランは、コナンを振り返った。

「コナン君」

「さ、さっさと帰りなよ」

言いかけたランを遮り、コナンは施政館を顎で指した。そして、
小さくため息をつく。

「まさか、またここに来るとはな。オレの件でこりたと思ってたけ
ど」

それだけ言うと、コナンはランに背を向けた。

「一緒に……」

「敵地にわざわざ戻る奴が、どこにいんだよ」

振り向きもせず言い放つと、コナンも姿を消した。

29・襲撃（後書き）

この回、他にも用があるので、解説は次にまわします。全部1話にひっくるめると、多分文字数が倍になりますので。

という訳で、状況説明はちゃんと入れますから、多少（？）（？）ご安心下さい。

30・同じ台詞

何事もなく、とはさすがにいえませんが、とりあえず無傷で館に戻ったランは、待ち受けていたエリに質問攻めにされた。

「何があつたの!？」

「私…狙われたの。銃で」

予想範囲内の答えだったらしい。エリの興味はそこではなかった。「それで!？」

ランは一瞬迷ったが、口を開いた。多分、隠しておいていい話ではない。

「助けてくれたの……コナン君が」

「コナン君が？」

ランは頷いた。

あの2つの音の正体は、薄々わかっていた。

先に聞こえたパシュツという音は、おそらく青年が消音器サイレンサーつきの銃を撃った音。そう、ランを狙って。そして金属音は、コナンが、あの手にしていた物で、その弾丸を弾くかなにかした音だろう。

エリに話すと、彼女は眉間にシワを1本刻んだ。

「…それで、コナン君は？」

ランは首を振った。

「あつという間に、いなくなっちゃった」

「そう……」

エリは、表情を少し険しくして、ランに向き直った。

「ラン、教えて欲しいことがあるの」

「何？」

「コナン君のこと。1年近く一緒にいて、あの子があなたに話したことを、全て知りたいの。私の考えが間違っていなければ、それが

この状況を打開する鍵のひとつになるわ」

「……………」

ランはよくわからないながらも、その後始まった質問群に答え始めた。

部屋に戻り、ランは一息ついた。母に聞かれたことは、本当に記憶の中の情報をあちこち引っぱり出しただけで、あんな話が本当に役立つのか……………。

(それより……………)

ずっと、引つかかっている台詞がある。

『オレは最初から、こうするつもりだったぜ?』

『最初から、そのつもりで近づいたんだ』

恐らく、まったく別の立場であろう2人にあの子が言った、同じ

台詞。

(どっちが、本当なんだろう……………)

どちらの時も、あの子は、表情の読めない顔をしていた。

『隠れ家』に戻ると、『ハットリ』は付近の様子見に行っていた。自分が外に出ていることはわかっていたんだから、頼めばいいものを。妙なところで融通がきかない男である。

手に持っているのは、金属製のバネ。例え銃で撃たれても、準備さえできていれば、銃弾をはじくことができる強度を誇る、かなりすごい道具だ。

それを手の中で玩もてあそびながら、コナンはボソツと呟いた。

「…早く、ケリつけらんねーかな……父さん」
いい加減、期は熟しているはずだし、何より、
もうこれ以上、彼女にひどい言葉を言いたくないのに。

30・同じ台詞（後書き）

おし、とりあえずここまで来た！

実は思っていたより少し早い展開なのですが、そこは私の構成力不足です。適当に話を休められるネタが、なかなか浮かばないものですから。

さて、コナンパパはどこで何をしているんでしょうねえ。これ、結構今後の展開の鍵になったりします。

そして、前話の時点で忘れていましたが（泣）、PVアクセス数10,000突破！！しかも、一昨日投稿したばかりの前話を、すでに100人近くの人を読んで下さっている！嬉しいです

気が向いたら評価や感想など送ってやって下さい。（こんな訳わからない話、評価しづらいかとは思いますが・・・）

31：問責（前書き）

- 問責「もんせき」・・・1．責任を問うこと。2．問い責めること。
2．の意味で解釈して下さい。

31：問責

コナンはふと周囲を見渡すと、徐おもむろに外に出た。あたりは不規則に木が林立している。

「どういう事だ、『コナン』。なぜ邪魔をした」

出口のすぐ脇に、『ハクバ』が立っていた。怒りを隠す気もないらしい。まったく表情を変えないコナンに、彼は質問を繰り返した。「なぜ邪魔をした。なぜ裏切った？」

コナンは口の端を吊り上げた。

「そうか、それを聞くまでは、オレを殺せないんだよな。しかし…」

一旦、言葉を切ってから、続ける。

「裏切り者が、そんなこと正直に言うと思うか？」

「……君は……！」

半ば言葉を失う『ハクバ』に、コナンはフツと嗤わらって言った。

「なに驚いてんだ？どーせ今頃すでに、オレへの抹殺命令が出てるはずだ。ひょっとして、お前にきたんじゃないか？」

…どっちにしろ、お前のとるべき道は一つだろ？迷う必要なんか、どこにもない」

いつかヘイジに言ったのと同じ意味の台詞をコナンは口にした。

そう 『組織の一員』としての『彼ハットトリ』に、選択の余地はなかったから。そして、今日の前にいる『彼ハクバ』にも。

彼は、今度こそ激昂したらしい。その様子に、コナンは少しばかり驚いた。

（こいつ、実はオレを結構気に入ってたのか？そりゃ、多少はお気に入りになる要素はあったらうけど……）

「いいのか？君がこんなことをすれば、父上の立場も危うくなるんだぞ！」

叫ぶように言いながら、彼は消音器サイレンサーつきの銃を構えた。

「心配してくれるのか。ありがたいな」

歩きながら、コナンは銃口の向きを油断なく見据えた。

彼は顔をしかめた。あまりにコナンが動揺も躊躇もしないので、怪訝に思ったらしい。

「…君は何を考えてるんだ？目的は何だ…？」

「……」

その問いに、コナンは一瞬足を止め、少し考えてから口許で微笑わらいった。

そうだな、ヒントぐらいはやってもいいか。

「なあ『ハクバ』……お前さ」

言つと同時に跳躍とつりし、近くの木の枝に着地する。そして続けた。

「『オレの母親の名前』、知ってるか？」

次の瞬間、コナンが懐から出した手から、狙い定めたナイフが飛んだ。

32：かつての家

「ねえ、ソノコ」

「ん？」

放課後、いつになく神妙な声に、ソノコは振り返った。

「あの家、まだあるんだよね？」

「ああ、そうね。ラン前に言ってたもんね」

かなり抽象的な言葉だが、ソノコには通じたらしい。

「何？いきなりそんな話」

「うん……ちょっと思い出してね。今、どうなってるかなって思ってた」

あの家 クイーター 政変前に住んでいた家は。

ソノコは少しだけ顔をしかめたが、すぐにいつもの笑顔に戻って言った。

「行ってみよつか、明日にでも。久しぶりにさ」

「ソノコ……」

「近頃、色々あつて元気なかつたからね、ラン。付き合つよ、気晴らし！」

「……ありがと、ソノコ」

かつて住んでいた家に行くのが気晴らしになるのか、というツツコミはしない事にしたランだった。

確かに、近頃は色々あつた。ありすぎて、自分がどんな状態なのか、わからなくなる程に。

「僕も行きます」

一応誘ってみたアキトは、すぐさま答えた。そして、少し照れくさそうに付け加えた。

「ランさんの前のお家って、僕行った事ないですし」

かつての家は、施政館からさほど遠くない所にある。車でせいぜい20分だ。

クレーター
政変後、母子そろってここを出たが、名義上はまだエリの土地なので、家そのまま残っていることは知っていた。が、実際来るのは本当に久しぶりだった。

建物は健在だった。ただ、手付かずだったので、それなりに老朽化してはいた。

「…ねえ、お母さん」

柱の一つに触れながら、ランが呟くように言った。

「何？」

「どうして、ここを壊さなかったの？」

「……………」

その問いに、エリは軽く目を瞞みはった後、静かにかつての自宅に視線を戻した。

「……………自分でも、はっきりとはわからないわ。ただ…」

「ただ？」

「残して、おきたかったんでしょうね、あの人と暮らした家を。…

…あの人が確かにいたっていう、証を」

ランは、ゆっくり視線を母から外し、建物に移した。

（そうだ、お父さんが死んじゃった時は、まだこの家にいたんだ…）

この家を我が家と呼び、よくシンイチと連れ立って出かけては、ここに帰ってきた。まだ母は国主になっておらず、自分も姫なんかではなかった頃。

「……………」

一方アキトは、別の考えを心中で述べていた。

（エリ様が再婚しないのは、やっぱりまだ、そのご主人を愛してるんだらうな……………）

アキトは、彼に直接会ったことはない。しかし、母子の様子をみ

るにつけ、思うのだ。彼女の夫は、彼女の父親は、たったひとりしかいないのだと。

幸せな人だ、と思った。

「どう、ちよつとは気が楽になった？」

帰り道、エリの問いに笑顔でうなずくラン。しかし、窓の外に視線を戻した顔に笑みはない。かといって悲痛な面持ちでもなく、物思いにふけっっているようだった。

やがて、声をあげる。

「ごめん、ちよつと停めてくれない？」

気がつくのと、そこは例の湖にほど近い林の脇だった。

「どうしたの？ラン」

エリの声を背に受けながら、ランは林に入った。

予感　　といえいいのだろうか。何か、あるような気がしたのだ。

ボレイガード 護衛たちが慌ててランに追いつく。というより、立ち止まったランに駆け寄った。

やがて追いついたエリは、言葉を失ったランの視線をたどり、呆気にとられた。

「……………」

ようやく言葉を取り戻したランの、悲鳴にも似た声が響いた。

「コナン君!？」

33：嫉妬

コナンは血まみれになって、木に寄りかかる形で座りこんでいた。意識はないらしい。

よく見ると、周りの土や木にも血がついている。傷ついた体を引きずって、ここまで来たようだった。

「急いで館に運んで!!！」

エリの指示で、ボデイガード護衛のひとりがコナンを抱え、車に運んだ。血はすでに止まっていて、凝固が始まっていた。

処置を終えると、コナンは館の部屋のひとつに移された。出血のわりに傷自体はさほど深くなかったので、付属の診療所から出てきたのだ。

「あの、僕に監視させてもらえませんか？」

というアクトの申し出は一同を驚かせた。エリに却下されかけたが、ホーシがとりなし、結局、部屋の外にも見張りをつける、という事で決定した。

目を覚ますと、見覚えのある天井があった。体を起こそうとして、痛みに顔をしかめる。

「気がついたか」

その声の主がわかった瞬間、コナンは、自分が今どういう状態なのかを理解した。

「……久しぶりだな」

少し大人びてはいるが、ほとんど以前を変わらないコナンの声に、アクトは顔をゆがめた。

「誰に襲われたんだよ。傷はみんな急所のそばだったって話だ。どつかの殺し屋か？」

「話す必要はないな」

ピシャツと言っておいて、今度は笑いを含んだ声で返した。

「あんたの顔からすると、本題はそれじゃないだろ？」

「……………」

言葉に迷っていたアキトは、やがて顔に怒りをにじませて切り出した。

「お前、どうしてランさんを裏切った？」

その質問に動揺したふうもなく、コナンは答えた。

「聞いてないのか？それがオレの仕事だって」

「そんなことを聞いてるんじゃない！」

アキトの声のボリュームが上がった。

「あの事件のことを聞いたとき、まさかと思ったよ」

この少年が彼女を裏切るわけがない。彼女を悲しませるようなことを、するわけがない。そう思って、疑わなかったのに。

「お前、ランさんが好きだったんだろ」

「……………」

コナンは少し顔をしかめた。そしてアキトから目を外した。

「…根拠は？」

「根拠だと…？」

アキトは歯軋りした。

「お前は、ランさんを好きだったはずだ。でなきゃ……………僕が嫉妬するはずがない。いくら僕が人間的に未熟で、感情的だって、お前みたいな子供に」

アキトは、最初からコナンが気に入らなかった。エリさえもコナンを信用しはじめても、ずっと。ただ、なぜなのか、自分でもわからなかった。

わかったのは、コナンが事実を認め、姿を消したと知った時だっ

た。

そんなわけない。あいつが、ランさんを裏切るなんて。

アキトは最初から、コナンがランを見る目に、愛しい者を見るような好意を感じていた。

コナンがランと同居してから、ずっとコナンに嫉妬していた。10歳も年下の少年に。それは、自分が彼女に向けているのと同じ感情を、コナンがランに向けているのだと無意識に感じていたから。そんな少年が彼女の所に居候していて、心穏やかでいられる訳がない。

しかし。だからこそ、彼女を突き放して消えたことに、納得がいかなかった。

『側にいるって、言ってくれてただけど……嘘だったんだって。本気じゃなかったんだって』

今にも泣きそうな顔で、それでも心配をかけまいと笑おうとした彼女に、アキトは怒りをおさえるのに苦労した。

だから、また会うことがあったら、絶対に言っつてやると決めていたのだ。多分、彼女への気持ちでコナンに詰め寄ることができるのは、自分だけだから。

「……………」

コナンはずっと目を閉じ、心の内を吐き出すアキトの声に耳を傾けていた。

33：嫉妬（後書き）

やっと書けました、このシーン。

この回も、連載当初から「絶対やるぞ」と思っていた念願の場面なのです。何を隠そう、この回のためにアキト君というキャラを考えたといいても過言ではないくらいです。

では、また評価・感想などお待ちしてます。

34：逃亡

やがてコナンは、閉じていた目と口を開いた。

「言いたいことは、それだけか？」

俄に冷気を増したコナンの声が、アキトの耳に響く。彼の反応を待たず、コナンは力を入れ、体を起こした。

「なに……!?!」

また血気づくアキトを視界の端に認めながら、コナンは続けた。

「それが言いたくてここに留まっていたなら、もう満足だよな。さっさと行けよ。オレが目を覚ましたと、エリさんに報告しにな」

そう言いつつ、そのまま出て行きそうな雰囲気のコナンに、アキトは慌てた。

「おい待てよ！ランさんに会わないのか？助けてもらったんだぞ！」

「あいつがそれを望んだ。だから助けた。それだけの話だろ？ま、エリさんの方はオレに色々質問があるだろうが、オレには今のところ、答える気はないんでね」

「なに……!?!」

コナンの胸ぐらを掴もうとのばしたアキトの手は、空振りした。

素早くアキトの後ろ手にまわったコナンが、首筋に手刀を入れる。「ぐっ……」

そのまま、自分がいた位置にアキトが倒れるのを確認し、コナンはドアの方を振り返った。

今の物音で、ドアの外にいた見張りが、慌ててなだれこんできたのだ。人数は3人。

しかし、コナンはいつのまに発見したのか、拳銃を構えていた。おそらくアキトが万一の時の威嚇のために持ってきたのだろう。

弾が入っていることを重さで確認し、ためらいなく引き金を引く。

パン！パン！パン！

小気味よく響いた3発の銃声の余韻が消えないうちに、コナンの姿はそこから消えていた。

慌てて入ってきたエリたちが発見したのは、昏倒しているアキトと、銃弾を受けた足をかばいながら、窓から身を乗りだす見張りの姿だけだった。

「助かったよ。やっぱ、持つべきものは使える相棒だな」

「何や、勝手なことぬかしよつてからに。お前、しばらく動くなや。無茶して動きよつたら、柱にでもくくり付けたるさかいな」

起き抜けに無茶な運動をして疲れていたコナンの体を横たえ、ヘイジは呆れ顔で応じた。

それでも、傷口は開いていない。さすがにコーリ随一の医療技術を備えた診療所だけある。

ヘイジはコナンに「様子見いつてくるわ」とだけ言い残し、新たな『隠れ家』を出た。前の所は『ハクバ』に見つかったため、他の候補所に移動したのだ。『上』には報告していない場所だが、それでも、発覚する危険性はある。それに、今やヘイジも立派に反逆者だ。

彼はふと、今コナンを置いてきた所を振り返り、思案げに目を細めた。

「……いっぺん、確かめなあかんかもしれへん……」

コナンがどうして命令に背いたのかを、彼は知らない。そして、かつての仲間と殺しあつてまで、あの姫を守ろうとする理由も。

どうせ、今の自分も規格外だ。なら、直接確かめるのも手のひとつだろう。

どうも危うい感じがする、親友を助けるために。

彼が言いたがらない、
真実を。

34：逃亡（後書き）

最近、「案ずるより産むが易し」と思います。

とりあえず書いてみれば、結構目論見どおりにいくものらしいです。お陰で、「これ書きたいけど、いけるかなあ」と思っていた場面のひとつが、無事書けそうです。

このあたりの回、もうちょっとさせたい会話があったんですが、展開が変わってしまいそうなので削除しました。でも、当初思っていたよりずっと妄想通りにいけてます。意外です（いや、勝手に書いてるんだから当たり前か？）。

35：恋敵

ヘイジが出ていくと、コナンはゆっくり体を起こした。

『ハクバ』にやられたのは、一応は予想の範囲内だった。

体格や筋力の差だけではない。『ハクバ』は、『コナン』の訓練に関わった一人なのだ。動き、癖、相当知っている。やりこめるのは簡単ではない。

それに……。コナンは独りつぶやいた。

「…最終的な敵は、あいつじゃないしな」

ふと、アキトの怒った顔が浮かんだ。

あんなにまつすぐに自分を見て、まつすぐな言葉を放ってくるのはあいつだけだ。コナンはクスツと笑った。

本人も思っているように、ランの心的ことでコナンを揺さぶることができるのは、彼だけだ。

そして、同時に。

お前がそうだから、オレは安心してあいつから離れられるんだよ。

普通、恋敵が姿を消したら喜ぶものだ。なのに、怒気もあらわに責めるのは、それがランにとって、深い傷になっていると知っているから。

彼は、自分がどうあると、彼女の気持ちを一番に考えてやれる。彼なら、彼女のそばにいてやれる。

「……………」

コナンは胸元をつかみ、一瞬感じた胸の奥を突き刺すような痛み
に、気付かないふりをした。

頭を振り、思考を切り替える。今も異国で動いている、父のこと

に。

(……早く、終わらせてくれよ、父さん……。このままじゃ、進むことも、退くこともできねーよ)

待っているのは、ただ一つの報しらせ。

自分の願いを叶えるため、そして過去を清算するための、すべての状況を変える、報なのだ。

35・恋敵（後書き）

短っ、この話。まあ、携帯読者様には見やすくいいですよ。ね。ね。ようやっと、コナンの狙いがちよっただけ見えてきました？でも、はっきりわかるのはもうしばらく先になるかと。なにせ、それが明かされる頃には物語も佳境クライマックスですから。

学校というものを鬱陶しいと思う日がくるなんて、ランは思ってもみなかった。

テストは面倒だけど、友人たちと会って勉強して。将来のことを考えるのも、主に学校だ。

母のあとを継ぐつもりはないし、その方面の能力も期待されていない。まさに、どんな可能性だってある。

しかし、今はそれを考える精神的余裕はない。授業も機械的に板書をとるだけで、指名されなかったのは幸いだった。

ソノコにも「大丈夫？」と何度もきかれた。詳しく話す気にもなれなくて、「大丈夫」と鸚鵡返しに答えるしかなかった。

あの時、銃声を聞いてランも駆けつけた。そしてかの少年が逃走したとわかった時には、色々な感情がうずまき、また涙が出そうになった。

どうして、私と話すことを避けるの。どうして、なのに私を助けてくれるの。誰にあんな怪我をさせられたの。あんな体で、どこに行こうというの。

お母さんさえ許してくれるなら、私はまた一緒にいてほしいと思っっているのに。近くに、いるはずなのに。姿を、あらわしてはくれない。

『仕事は終わった』と、あの子は言った。なら、私の近くにいる必要なんてないのに。

帰り道、じきに館の敷地内というところでランは立ち止まった。

道端に、腕を組んでランを凝視する青年がいる。整った顔だちの、ずいぶんと肌の色の濃い青年。

といっても、敵意があるふうでもない。ただ、意味ありげな視線

を向けてくるだけだ。

やがて、彼は口を開いた。

「…あんたが、ラン姫やな」

「すかさず、護衛ボデイガードがランをかこみ、戦闘体勢をととのえる。が、彼は身動きみじろもしなかった。

「やめとき。お前らが束になってかかってきたかて、オレは捕まえられへんさかい」

その独特の言葉遣いに戸惑いながらも、ランはたずねた。

「…あなたは、誰？」

「オレは『ハットリ』や。ちゆうても、本名やあらへんけどな」

自分から、本名ではないと明かすとは。ランは警戒を強めた。

「…誰なの？」

質問には答えず、彼はひとつ息をついた。

「……そない身構えんでも、あんたに危害を加えるつもりはあらへん。ちよお質問があるだけや」

「質問？」

こっちの質問には答ええないのに　というランの目つきに気付いたのかどうなのか、彼は話を続けた。

「…シンイチつちゆう奴、知つとるか？」

ランは、思わず護衛ボデイガードを押しつけ、彼に近づいた。

「シンイチ！？あなたシンイチを知ってるの！？」

その勢いに驚いたのか、少し目を開いた彼は、すぐに目を細め、つぶやくように確認した。

「やっぱり、知り合いやってんやな。どないな関係や？」

「幼馴染みよ！昔はいつもいっしょに遊んでた！教えて、シンイチはどこにいるの？あなたはシンイチの何なの？」

幼馴染み　。彼はぼそりとつぶやくと、息をついた。

ヘイジの中でバラバラに浮かんでいた欠片ピースのほとんどが、組み合

わさった。

そうか、あいつは。

姫と知り合いかと聞いたとき、ニヤツと笑った彼。

傷ついた体を引きずって館から逃走し、『隠れ家』に戻るといつた彼。

「そういう、事かいな……」

何もかも、彼女のためだったのか。愛しい幼馴染みのために、あいつは。

ヘイジはもう1度、深く息をついた。

36：質問（後書き）

えっと、あらかじめお知らせします。

長いですが、この回。書いてて作者がびっくりしたぐらい、長くなります。現在、4つ目の部分を執筆中ですが、終わる目処が立ってません。

以上、お知らせ終わります。

37：疑惑から確信へ

急に黙りこんだ彼に、じれったくなつたランは服をつかんだ。

「答えて！」

「……………」

彼はゆっくりとランの手を外すと、閉じていた目を開いた。

「…オレは、あいつの親友や」

「親友…………？」

うなずき、今度を困つたように肩をすくめる。

「悪いけど、オレからあんたにあいつのことは詳しく話せへんわ。

こうやってあんたに会うてること自体、あいつには内緒やし」

「……………」

その言葉にうつむいたランは、ひとつだけ尋ねた。

「…シンイチは、元気でいるのね？」

彼は少し考えた後、答えた。

「……………ああ、ぴんぴんしてんで」

「そう……………」

心底安心したようなランに、彼は目元を和ませた。

「あと、もう1コ聞きたいんやけど……………」

「何…………？」

友を心配しているような、しかし何か先を見据えているようなな
んとも形容しがたい彼の表情に、ランは怪訝そうに首をかしげた。

随分遅くなつて戻ってきたヘイジの顔を見るなり、コナンは目を
すがめた。

「……………どうした？」

「何がや？」

一応すつとぼけてみるも、コナンには通じなかった。

「とぼけんな。何かあったって顔に書いてあるぜ」

「大した事やあらへん。例の姫に会うてきただけや」

瞬間、コナンの顔色が変わった。その目的を察したからだ。

「余計なことするな！第一、どうしてお前が知る必要がある？」

「余計なことするな、なんて、お前に言われたないけどな。……教えたる。お前が、自分捨てとるみたいに見えたからや」

そのはつきりとした口調に、コナンは口をつぐんだ。

「オレは、ずっと変や思ってた。仕事始めたとき いや、お前が志願した時からやな。何やお前らしいって、違和感あったんや。幼児化なんちゆうふざけた提案も、お前やったら絶対嫌がる思ってたのに、あっさり受けてまいよったしな。

仕事始めて、オレらの存在を政府側に知られたときや、違和感が確信に変わったわ。お前、完璧主義者やさかい、あの余裕の態度にな。それで、あの逆行行為や。初めてわかったわ、お前が最初から、あの姫を生かすためにここにきたいいう事がな。

ほんで、今日姫に聞いてわかったんや。お前は前々から、あの姫に惚れとった。せやから、姫の近くに行くためにこの計画に加わったんやな 近くにおって、守るために。それで、ここに来て姫に気付かれへんために、幼児化せなあかんかった。せやなかったら、いくら何年も会うてへんいうても、幼馴染みや。すぐに見破られるさかいな。……反論せえへんとかみると、凶星やな？」

「……お前には、関係ない。付き合ってくれてることには感謝してるけど」

ヘイジは短く息をついた。

「……予測はしとったけど、ホンマの目的言えゆうても無駄やろな。ただ、これだけは言わしてもらおうで」

ヘイジは、コナンを正面から見据えた。

「お前、それでええんか？家も家族も名前も、ホンマの自分まで捨ててあの姫守って、お前に何が残るんや？あの姫かて、そないなこ

とされて喜ぶとでも思ってたのか？」

コナンは、ふっと笑った。

「……お前、あいつの何を知ってるんだ？」

蔑んでいる口調ではない。逆上しているのでもない。だだをこねる子を諭すような、静かな口調だった。

彼女とは、いつも一緒だった。

性格、得手不得手、趣味嗜好、すべて知っている。彼女に関することなら、多分彼女の両親の次に知っていると思う。

コーリを離れるといわれた時、まっ先に考えたのは彼女のことだった。他のたくさんのもつと別れることは納得できた。しかし、彼女と離れることだけは嫌だった。

なんで？なんでだよ？オレはあいつの側にいたいだけだ。たったそれだけなのに、どうして駄目なんだよ？と。

結局は根負けして父についた行つたのだから、彼女への気持ちを忘れたからじゃない。妻を喪い、どこか様子に違和感を感じた父を氣遣つただけだ。

「あいつの事なら、お前に言われるまでもねーよ」

「…せやったら、オレに言われへんでもわかるか？姫が『コナン』をどない思てるか」

コナンは、呆氣にとられた。

「お前、そんなことまで……」

「それを知らんことには、説教もできへん思てな」

結論からいくで、と前置きして彼は続けた。

「残念やったな、シンイチ」

「……？」

「お前の苦勞、あんま身を結んでへんで」

「あんだ、『コナン』のことどない思つ？」

その名前に、ランの瞳は複雑に揺れた。

「コナン君のことまで知ってるの、あなた……」

「ああ、オレも一応関係者やさかいな。その辺は深う聞かんとい
くれ。……ほんで？『コナン』を恨んでるか」

ランは、何度か口を開閉させたが、やがてうつむいた。

「……ごめんなさい。自分でも、よくわからないの。あの子を好き
なのか嫌いなのか。……だって、何もわからないんだもの。いなく
なったと思つたら、突然現れて助けてくれて。なのに、またすぐに
消えてしまつて。あの子が何を考へてるのか、全然わからないもの。
でも、これだけはわかる。コナン君と一緒にいたとき、私に向け
てくれたあの笑顔は本物だった。かけてくれた沢山の言葉は、本物
だったの。だから、訳を聞かせてほしい。私にできることがあるな
ら、何でもしたいわ」

それは、間違いなくコナンを肯定する台詞だった。好きか嫌いか
わからないと言いつつ、ランはまだコナンを受け入れていた。彼女
は顔を上げ、彼を見た。

「あなたは多分、コナン君の居場所を知ってるのね。あの子が何を
考へてるのかも。あの子に伝えてくれない？…私は、コナン君の味
方だつて。私でよければ、力になるつて」

「……………」

ヘイジは、その台詞をかみしめるように口を閉ざしたが、不意に
鋭い目つきになると、ランから視線をそらした。

「…アイツは、あんたに惚れとる。あんたのために、持つとつたも
ん全部、捨てようとしとる。もう、いくつかのもんを捨てた。い
や、捨てたと思とる」

家。家族ちかぞへとの生活。名前。そして 本当の姿。コナンはすでに、
それを捨てた。いや、捨てたつもりでいる。いつかコナンが言った
『シンイチは死んだ』という言葉は、真実なのだ。少なくとも、
本人にとっては。

「え？」

ヘイジは気にするなとばかりに首をふり、そらしていた目をランに戻した。

「あなたの言葉、とりあえずあいつに伝えとくわ。あいつも、そんな何か変わるかもしれないしな。」

あと、当分警護をきつうしとく事やな。あなたの命は、色んな意味で大事やさかい」

「姫はまだ、お前を信じとる。お前は、自分を恨んでほしい思て、色々言つたみたいやけどな」

「……………」

ヘイジは、コナンの反応をしばらく待った。そして予想通りさつきまでとはまったく口調の違う声が、漏れた。

「……………どうしろ、ってんだよ……………」

うつむいていたコナンが、顔を上げた。

「今から、どうしろって言うんだよ？オレの望みは変わらない。そしてこの体だって、元には戻らねーんだ！オレは、もうシンイチじやねーんだよ！これで、今から何を望めってんだ？」

「元に戻るとしたら、どうや？」

静かにはさんだヘイジの言葉を、コナンは危うく聞き逃すところだった。

「え……………？」

彼の言葉を理解できず、呆然とするコナンに、ヘイジは懐から何やら出して、見せた。

ビニール袋に入った。1錠のカプセル剤を。

38：味方（後書き）

今ちょっと修正したら、またえらく長くなってしまいました。すみません。

ただ、次の話で、この場面終われると思います。

39・元に戻す薬（前書き）

この話、哀ちゃんに少しせつない内容になってます（幼児化してないから志保さんだけど）。
ご注意ください。

39・元に戻す薬

コナンは言葉を失った。喉にはりついた声を、かるうじて搾り出す。

「……なん……だよ……、それ……」

「お前の体を、元に戻すための薬や」

どこかで予想していた答えに、しかし思考がついていかない。

「……まさか」

コナンは、薬から目を逸らす。

「元に戻るなんて、シホは一言も……」

「お前が発ったときは、まだできてへんかったさかいな。あれから作ったそうや」

「……………」

シホとは、シンイチがコナンになるための薬を作った、協力者の名前だった。シンイチとはヘイジ同様、個人的なつきあいもあった。シホの家は、代々薬草や漢方の大家で、現代ではそれに薬学や科学の情報もプラスし、人体に関することならおおよそ不可能はないといわれる家だ。それに、彼女自身の頭脳の高さを『上司』が買い、話を持ちかけたのだ。

しかし、彼女は薬を渡すとき、言ったのだ。飲んでもちやんと幼児化する保証はない。仮に幼児化に成功すれば、二度と戻れないと。

「そら、お前の覚悟を試したんや。そんならいのつもりでおらへんと、渡すわけにはいかん、てな」

「……にしても……全然聞いてない。彼の命令か？」

「いや、あのオヤジは知らへん」

「え？」

コナンは面食らった。彼女は、彼に頼まれて薬を作ったはず。ヘイジは苦笑した。

「やっぱ、氣いついてへんかったんやな。シホさんが、お前に惚れとった、て」

コナンは、目が点になった。

「……………は？」

少ししてその言葉を消化すると、コナンは乾いた笑いをもらった。……まさか。んなこと、あるわけねえよ。だってあいつ、そんなこと全然……………」

「お前が、誰か別の女に惚れとるて、知つとつたさかいな」

出来上がった薬をこれから発つヘイジに渡したとき、ヘイジはそれを言い当てた。すると彼女は、つぶやくように言ったのだ。

『彼、前に言つてたわ。二度と会えないかもしれない人を想い続けるのは、馬鹿なのかなって。……………じゃあ、決して振り向いてはくれないとわかってる人を想い続けるのは、やっぱり馬鹿なのかしら』

「……………」

「元々、協力を決めたんも、お前の望みを叶えられるんは自分だけや、て思たからやる。けど、もうちょいで薬ができるうちゅう段階になって、氣いついたんや。オレが言うたんと同じ考えにな」

コナンはうつむいた。無意識なのだろう、両手を握り締めている。ヘイジはしばらく黙ってみていたが、やがて口を開いた。

「お前が思てる以上に、お前を大事に思とる人間はおんねや。もうちょい、自分を大事にせえや」

コナンは、突然ふきだした。

「なんや？」

いぶかしむヘイジに、くすくす笑いながら答える。

「非合法組織に属するスパイが言うことかよ、それ」

「ええやんけ。オレみたいなええ男が言うたら、様になるやる」

ぶすつとするヘイジに、コナンはまた笑った。確かにオレは、自分自身のことには無頓着すぎたかな。

「わかった。……けど、目指すものは変えない。オレの望みはやっぱり、そこにしかねーんだ。

そこで、忠告しておくよ。 お前、シャナンに帰れ」

「!?!」

ヘイジは目を睜みはった。

「もうすぐ、向こうで状況が変わる。そうなると、元々正式にコーリに入国しないお前は、帰れなくなる可能性がある。そうなる前に、なんとか帰国しろ」

その言葉にヘイジは息をのみ、やがてつぶやいた。

「…そういう、事やったんか？お前の目的は……。けど、せやったら、お前と『ハクバ』は……サグルはどないなんねん？それとも、あいつも巻き添えにするんか？」

「いや。あいつも、早いとこコーリから出さなきゃならない。あいつは『敵』に近いが、敵じゃないからな。 オレは、ここに残る。

元々オレは、コーリの人間だしな。という訳で、コレは一応受け取っておく」

そういつて、ヘイジの手から袋を掠め取る。そして、苦笑した。

「……シホには、悪いことしたな。伝えといてくれよ、オレみたいな奴を好きになるなんて、お前はやっぱり馬鹿だつて。友人として、幸せになるよう祈ってる、つてな」

最後にあの不器用な、優しい友人を思い浮かべ、コナンはもうひとつ小さく苦笑した。

39：元に戻す薬（後書き）

ごめんなさい、なんとか1話にまとめようとかがんばってみたら、か
つてない長さになってしまいました（泣）

まあ、これからはやっとクライマックスに入る予定ですので。

40：悲鳴

「……………」

薄暗い執務室。先ほどから目を閉じ、顎を指でつまんで思案していたエリは、ふいに顔を上げると、ある決意を宿した瞳に、別館じたくを映した。

「……………気乗りしない方法だけど」
やるしかないか。全てを　終わらせるために。

コナンが寝入り、『隠れ家』を出たヘイジはため息をついた。
まあ、コナンが本当に眠ったかどうかはあやしいものだが。

コナンの目的も、彼が敵としている人物もわかった。ただ、理由は知らない。

尋ねてみると、コナンはただ一言、

『知りたいか？』

と念をおした。

凧いだ海のような、瞳と口調で。

それで、わかった。コナンが、こうなるまで彼に何も話さなかった理由が。

知らぬが仏という諺ことわざがあるように、知れば、その事実を背負おうことになる。ただでさえ裏切り者のコナンに付き合っあって居所のない彼に、これ以上重荷を増やしたくない。そんな思いで、コナンは口を閉じたのだ。

「…今更やんな、そないな氣い遣こわれても」
独り呟く。そう、まさに今更なのだ。

多分、感情的に言いたくなかったのもあるんだろう。まあ、彼あいつが言いたくないなら、あえて聞く氣もないが。

「謎のまんまにするべき事……か」

さて。ヘイジは、生まれ育ったシャナンがあるはずの方角を見た。

問題は、こちらの政府の警備線。

傷もほとんど癒えて、コナンは林を歩いていた。湖の近くのあの草むらに入ると、まだ少し血の跡が残っている。

コナンは不意に振り向くと、木々の間に声をかけた。

「サゲルか」

意外と素直に姿をみせた青年は、すでに存分に顔をしかめていた。コナンに本名を呼ばれるのは数か月ぶりだ。

「……治ったのか」

その声には、驚いた響きがある。コナンは少し笑った。

「なんだ、言ってなかったか？例の薬で、オレの細胞の造りは少し変わったんだって。自然治癒力が、普通の子供より高い」

とはいえ、物語のような超人的なものではないが。

「そうか」

彼はさして追求しなかった。人の体が縮むという現象を知っては、もうそのくらいでは驚かない。早速、本題に入った。

「 答える。あの時の続きを」

コナンは苦笑した。……わざわざ本名で呼んだ意味を、こいつは全然わかっていない。

「ヒントは、ちゃんとやったんだけどな。お前、オレの母さんのこと、父さんから聞いたことあるか？」

…沈黙。ないらしい。

「それが、この件と何の関係があるんだ？」

「原因であり、始まりさ」

コナンは初めて、彼を正面から見据えた。

「オレの母親の名はユキコ。このコーリで、女優として名を馳せてた。…約8年前まではな。

知ってるだろ？組織が、その頃もコーリで『仕事』してた事は。そして」

コナンの話は途切れた。鋭敏な聴覚が、遠くの声を持ったのだ。それも、覚えのある声。

「まさか……！」

コナンの顔色が、変わった。駆け出そうとして足を止め、さつきとはまったく違う焦った顔で振り返った。

「とにかく、お前にとって、オレ達父子おやこは、もう完全な敵だ。そして父さんの動きは、もう終盤に入ってる。シャナンに帰れ。お前は、親父さんのそばにいた方がいい」

それだけ言うと言を返し、見当をつけた方に走り出した。

（またここに来たのか？ ラン！）

それは確かに、ランの悲鳴だった。

叫びだしたいのをこらえ、手当たり次第に、木々の間を探していたコナンは、不意に背後に気配を感じた。　　が、振り向くより一瞬速く、コナンの鼻と口を何かが塞いだ。

……それが薬品浸けの布だと気付いたのを最後に、コナンの意識は闇へ落ちていった。

40：悲鳴（後書き）

ちよつと間があきました。決して煮詰まっていた訳でも（いや、多少詰まったけど）、忘れていた訳でもありません。正月で家族が家にいて、やりづらかったんです（だって、FF小説を理解できる人達じゃないんだもん）

この回、次の話の場面を書きたくて、どうにかその状況に持つていけないかと悩んだ末の苦肉の策だったんですが、案外いい前フリになりました。うん、災い転じて福（違うか）。

41：提案

カツカツと、ヒール靴の音が響く。足音の主はすぐにわかった。ひと月程前まで、毎日のように聞いていた足音。

彼女は側近に続いて部屋に入ると、複雑な眼差しを少年に向けた。

「……久しぶり、とは言えないわね」

「そうだね」

彼が館から姿を消して、まだ一月たっていない。

「元気そうだね、エリさん」

捕らわれているというのに、恐怖や不安の欠片も感じさせないコナンの表情と口調。それが、少し皮肉っぽいものに変化した。

「にしても、エリさんらしくないね。あんなわざとらしい畏仕掛けで、オレを捕まえるなんてさ」

「……」

何も説明されなくても、状況はわかっていた。

コナンが付近にいることを察知して、録音しておいたランの悲鳴を流す。まあ、彼女がランを傷つけるわけではないから、ホラー系のもので見せて用意したのだろう。

コナンをただ捕らえようとしても、気配に気付かれればかわされる。だったら、コナンから射程距離に入るよう、仕向けたのだ。

そして、現在コナンは、窓が一つあるだけの殺風景な部屋で、後ろ手に手錠でつながれていた。手錠には縄がゆわえつけられ、隅の金属製のフックに留められている。

「確信してたんだね。オレが必ず駆けつけるって。この間、あいつを助けたから？」

「あれが決定打だったわね。でも、あの事がなくても、それはわかってたわ。あなたがここから姿を消したときに感じた、違和感が解

けてからね」

コナンは目をわずかに細めると、無言でつむり、体の力を抜いた。

「あれだけ綿密な計画をたててあなたを送り込んだんだもの。あなたの上司は、あなたがどうやってここから引き上げるかも決めていたはずよ。その場合、用が終わったランをただ放り出すとは考えにくいわ。あなた、ランを殺すよう命じられていたんじゃない？」

数分の間、コナンは目を閉じ、口を開かなかった。……そして。

「……………そう。オレの仕事のラストは、あいつを殺し、証拠を隠滅して帰還することだった。信頼してた子供に裏切られ、精神的に動揺していれば、隙はいくらでもできるだろうってね」

「けれどあなたは、それをしなかった。だからわかったわ。ランはあなたにとって、特別なんだってね。それで、あの子に全て聞いたわ。あなたがあの子に話した、あなた自身のことを」

コナンが反応しないので、エリはそのまま話を続けた。

「あなた、ご両親のことを聞かれて、言ったそうね。お母さんは亡くなった、お父さんのことは言えないって。多分、お父さんは今も、別の処ところで生きているんじゃない？　でも、それを正直に話す義務なんて、あなたにはない。むしろ、あの時は両親とも亡くなったって言った方が、立場上良かったはずよ。でも、あなたはそう言わなかった。

私があなを疑った時もそうね。追ってきたランに、あなたは事件との関わりを否定しなかった。……あなたは、ランにだけは、必要な嘘以外はつけなかった。つきたくなかった。違う？」

「……………だから？」

コナンは、さっきまでより少し挑戦的な目をエリに向けた。

「オレがどうあると、エリさんには関係ないだろ？　そんなことが言いたくて、わざわざ置はった訳？　……………オレに、聞きたいことがある

るんじゃないの？」

「あら、聞いたら話してくれるのかしら？」

間髪容れない切り返しに、コナンは口ごもった。エリは苦笑する。
「色々聞きたいのは確かだけどね。正面からきいても、あなたは答え
えないでしょう。だから……取引をしない？」

41：提案（後書き）

これまた話題がありすぎて、まとめるのに苦労しております。
ともあれ、クライマックスに入っているのは確かですので、もうし
ばらくお付き合いですと嬉しいです。

42：取引の内容

「取引？」

コナンは、疑問形で返した。が、大して驚いているようには見えなかった。エリはうなずいた。

「あなたが持っている情報をくれたら、望みを叶えるわ。できる範囲でね」

「……解放する、とは言わないんだね」

「それが望みなら、それでもいいわ。……といっても、あなたはここにいた方が安全だと思うけど」

そう、すでにコナンは上司や仲間を裏切り、実際に深手を負わされている。解放されたところで、安心はできないだろう。コナンは小さく笑った。

「そうだね。……それに、外に出るよりここにいた方が、待ってる情報が早く入りそうだから」

エリは、眉根を寄せた。

「情報？」

この子が求めるべき情報が、まだ施政館せいせいにあるのだろうか。コナンは、エリの問いかけを無視した。

「エリさん、オレがどこから来たのか、薄々わかってるよね？」

「……ええ」

それは、ずっと考えていた。

コリーに密偵を送って、情報を得ようとする可能性のある国の1番が、シャナン。

8年ほど前、丁度エリが現在の席についた同時期から、国交をほぼ絶っている国だ。

コナンは満足そうに微笑み、そして苦笑した。

「怒らないでよ。ちゃんと話すことは話すからさ。まあ、オレの話がいつまで役に立つかは保証できないけど」

後半は、相手に聞こえないようにつぶやく。

「つて事で、条件決めたよ。糸を、緩めてほしい」

「糸？」

エリの繰り返しに、うなづくコナン。真剣な表情になる。

「オレの仲間が いや、かつての仲間である友人、かな。じきにコリーを出すはずなんだ。助けてくれとはさすがに言えないから、ちよつと見逃してくれないかな」

「お前、そんなこと……」

思わず口をはさむホーシを、エリは制した。

「あなたを置いて逃げるの？なのに、あなたはその人を助けたいの？」

「勘違いしないでね。あいつがオレを見捨てたんじゃない。オレがここに残るって決めたんだ。オレは元々、コリーで生まれ育ったから」

意外な告白に、ふたりは驚いた。しかし、コナンはするりと表情を戻す。

「けど、今の本題はそれじゃないでしょ？……どうする？乗る？降りる？」

いつの間にか、話の主導権をコナンが握っている。エリは少し迷ったが、拒否する理由もない。何より、この少年の1番の弱点はもうわかっていて 隙なら、つくり出せる。

「いいわ。国境線の警備を緩めればいいのね。いつまで？」

コナンは、にっこりと笑った。

「多分、今日か明日で終わるから、そう長くは必要ない。そうしたら、全部話すよ。約束する」

コナンの狙いを理解したヘイジなら、すぐさま準備をして『隠れ

家』を発つだろう。サグルも、何とか言いくるめて連れ出してくれ
るはず。そして、コーリの国境の警備を緩めれば、あとは問題なく
戻れる。 『上司』に力があるうちは、まだ。

利用できるものは、利用する。例えそれが、大事な人を殺した敵
でも。

(急げよ、ヘイジ……時は迫ってる。早ければ今夜にでも…事は起
こる)

そしてその考え通り、その夜のうちに、その出来事はコーリ周辺
を揺るがせた。

そう……約8年前、コーリで起こった政変クーデターのように。

42：取引の内容（後書き）

ここまでできて何ですが、一つ注意事項があります。

この話、世にも珍しく、ラスボスが最後まで名前しか出ません。いや、実はずーっと敵の名前を考えてなくて、存在は前々から仄めかしていたものの、名前自体はまったく思いつかなかったんです（原作にも、イメージの合う人が見当たらず）。

今更注意されても遅い上に、注意されたからって何？って感じですが、一応。予告しておきます。

43・衝撃（前書き）

難しい言葉が出ます。文末に意味を載せておきますが、わからなければ、すいません、お調べ下さい。

43：衝撃

早朝のことだった。

「エリ様！今情報が入りました！シャナンのアライ主席が弾劾^{だんがい}され、政権が崩壊したようです！」

「何ですって！？」

さすがのエリも、お約束通りの反応しかできなかった。それほど、衝撃的なニュースだった。

アライは約8年前にシャナンで、最高権力者である主席の座をもぎ取り、国交を断絶した張本人だった。そして、長期にわたって権力をふるってきた、いわば独裁者。

コナンの顔が、浮かんだ。

『多分、今日か明日で終わるから』

あれは、このことだったのか…？

コナンを送り込んだのがシャナンの関係者なら、相当の重鎮^{じゅうしん}だろうとは思っていた。なにせ、その人物が狙ったのは、一国の姫の暗殺だ。しかし、なぜその当人が失脚するのか。

エリは必要な指示を出すと、コナンを拘束している部屋へ急いだ。

コナンはエリの顔を見るや、事態を察したらしい。微笑んだ。

「…終わったんだね。よかった」

しかし、エリには理解できない。

「どういう事？アライ主席があなたのボス？」

「そうだよ」

そして、心中で付け加えた。

彼は、サグルの父親でもある。

「じゃあ、なぜ彼は弾劾され、あなたはそれを予知していたの？あ

あなたの本当の目的は？」

「別に、予知したんじゃない。弾劾したのは、オレの父さんだよ。オレたちの目的は、あの男を告発すること。そして……ランを守ること」

エリは、混乱した思考を必死で落ち着けた。深呼吸をくり返す。

「…順番に訊くわ。あなたがここに来たのは、何のため？」

「ランを守るため。それだけだよ。実際の諜報役にならなければ、あいつを守れなかったから。間諜スパイだって、したくなんかなかった。ただ、諜報しとくほうはしなければ、あっさり御役御免おやくごめんで別の人間が来る。そいつは間違いなく、命令通りあいつを殺しただろうからね」

現に、『ハクバ』はランを襲った。あれは、まさにそれだった。

「…じゃあ、彼の失脚を狙ったのはなぜ？」

コナンは不意に口をつぐんだ。目を閉じて数分沈黙し、やがて口を開く。

「……あの男が、オレの母さんを殺した。いや、殺させたんだ」

予想外の答えに、エリはまた思考が止まりそうになった。

「お母さん……？亡くなったといってた？」
うなづくコナン。

「母さんは、8年前に殺されたんだ。このコリーで」

コナンがコリーで生まれ育ったといっていたことを、エリは今更のように思い出した。コナンは表情に少し苦渋くじゅうを浮かべながら、話を始めた。

「全ての始まりは、あのとき　母さんの死だった」

弾劾……公の地位にある人の罪を調べ、責任を追及すること。
重鎮……ある分野での中心人物。

43：衝撃（後書き）

ついに出了した、ラスボスの名前！いやほんと、この回書くのに、必要に迫られて決めました。程よく黒くて、でも普通に人名として使えそうな名前・・・ハイ決定！って感じで。

理由は超簡単です。a l i e（嘘） アライさん。

主席にしたのは、独裁者の地位といえば国家主席か総書記っていうイメージがあつて。

えっと、独裁者をどないして国内から弾劾する？というツッコミはご容赦下さい。

44：回顧↪真実↪（前書き）

「25：回顧↪父と息子↪」の続きから入ってます。

44：回顧（真実）

「オレに、話してなかった事……？」

戸惑うシンイチに、ユーサクは重苦しく答えた。

「ああ。ユキコ……母さんのことだ。母さんは 殺されたんだ」

「……母さんが、殺された……！？」

シンイチは呆然とした。父はずっと、母の死を事故死とっていいたし、シンイチも、それを信じていたから。

「ああ。私がいる、あの組織にな。」

彼らは、当時もコーリで水面下の活動してたんだ。そして、母さんはそれを知ってしまった。だから彼は、母さんを殺すよう命じた。口封じのために」

「……まさか。父さんは、母さんを殺した奴の下で、ずっと働いてたっていうのか？」

「証拠をつかむためにな」

ユーサクは窓から離れ、ソファに腰かけた。

「ただ声高に殺人を叫んでも、何も変わらないからな。まして、相手は権力者だ。事実を知っているだけでは、証拠にはならない。だから組織に入り込み、信用させ、物証を集めていたんだ。そして、準備は整った。お前は、彼女を守ればいい。私は、ユキコかたきの仇をとる」

『それ』が起きるまで、彼女を守り抜くこと。それが、私がお前に与える役目だ。

コナンがかいつまんで語り終えると、エリはうつむいていた顔を上げた。

「……聞きたいことが、あるんだけど」

「何？」

今更隠すことはない……ただ一つの他は。そう思って返したコナンだったが、エリはそれをズバリきた。

「あなたのお母さんの、名前は？」

コナンは少しだけ、体をこわばらせた。過去はすべて話したが、名前だけは伏せていた。

「……どうして？関係ないじゃない」

「心当たりがあるからよ」

言いながら、エリは困惑を隠せないようだった。自分の考えが信じられない、というように。

「あなたが最初からランに強く執着していたことからすると、ランとは元々の知り合いだった、と考えられるわ。でも、知り合いならあの子も気付くはず。…つまり、あなたは何らかの方法で姿を変えている可能性がある。」

……あの子の知り合いで、その頃にお母さんを亡くした子を、私は一人知っているわ」

「勝手に話を進めないでよ」

コナンの口調が、明らかに刺々(とげとげ)しくなった。エリは自分の考えが的中していたことを悟ったが、笑顔をみせる余裕まではない。

「随分、イライラしてるようね。それは……」

エリの言葉は、軽快な、しかし焦ったような足音にかき消された。すぐ後ろから、追ってくる人間も一人。

その人物は、エリを、次にコナンを見て、蒼白になった。

「コナン君！どうしてこんな……！」

手錠からつながった縄を解こうと、フックに手をかけたのは、ラシカ。しかし、その時だった。

「
あ
ん
た
は
誰
？
」

45：本当の名前

ランがこんな早朝から目覚めるなんて、かなり珍しいことだった。それだけ、施政館は混乱していたのだ。

そして、エリの不在に動揺したホーシの言葉を、偶然聞いてしまったのだった。

『もしかして、あの少年の所か？』と。

『あんたは誰？』

「……え？」

鋭い声でランの手を止めたのは、誰あろう、コナンだった。いぶかしむランに、コナンは続けた。

「どんな立場でここに来たんだ？17歳の高校生としてか？それとも、コーリ国の姫としてか？」

「……なに言ってる……」

コナンは、ランに目を向けることなく、目の前の地面をにらんでいた。

「あんたが今、ここでオレを放せば、それは『姫のしたこと』になる。オレがもし逃げれば、それは『姫の責任』だ。それをわかった上で、ここに来たのかって聞いてんだよ」

わかっているわけがない。ランの手は、かすかに震えだした。

コナンは顔を上げ、エリに視線を戻した。

「……話がそれだね。オレの話は終わり。あとはエリさんに任せるよ」
しかし、エリは流されなかった。

「……そこまでして隠したいの？あなたの本名を」

「……そっちこそ、是が非でもオレの正体を暴きたいのか？……気

付いてるはずだろ？母親として、娘を傷つけないのかよ？」

「私は、この子は被害者として、真実を知る権利があると思うわ。」

……言っておくけど、元々このことをランに隠していたのは、交渉のため。『この子に知らせない』ことが、あなたから、話を聞きだす有効な手だと思ったからよ。いずれはランにも会わせて、納得させるつもりだったわ。」

でも、今の状況はかえって私に有利なようね。答えてくれる？あなたの本当の名前は……『シンイチ』？」

その名前に、ランが弾かれたようにコナンを見た。

45:本当の名前(後書き)

アクセス総数20,000突破!!ありがとうございます!!

46：捨てたはずの、名前

沈黙は、実際よりも時間を長く感じさせる。たったの10秒が、6倍にもなる。

この場合、まさにそうだった。

コナンが沈黙していたのは、恐らく数分。そして、ようやく……。「捨てたはずの、名前だった」
独り言のような、声。

コナンは小さく息をつくと、諦めたような笑みをこぼした。

「ひと月前なら、絶対違うって否定できたのに……。」
「どうして？」

疑問を呈したのは、エリだ。ランは血の気が戻る様子もなく、目を見開いたままコナンを凝視している。ホーシはホーシで、話が見えていないらしく、口を開けては閉めている。

コナンは苦笑を浮かべて、エリに視線を向けた。

「オレを捕まえたとき、薬を一つ見つけたる？」

「え……ええ」

「あれがなかったら、オレはシンイチじゃないって、言い張れたんだよ」

エリの目が、開いていく。

「……あれは……まさか」

「そう。オレの体を、元に戻すために作られた薬だよ。あれの存在を知らなかった時なら、誰が相手でもきっぱり否定できたんだ」

エリは、一瞬言葉に詰まったが、すぐに答えに行き着いた。信じられないことだったが、確信していた。あの薬、この少年の本名、……それしかない。

「……薬で、体を幼児化させたのね。その薬は、今回の件が終わったら、あなたを戻すつもりで？」

コナンは乾いた声で笑った。

「こんなうまい手を1回きりにしたり、任務の度に幼児化させたりなんて効率の悪いこと、するわけないだろ?……あの男は、オレを戻す気なんてなかったよ。大方、オレが使えるうちは子供として最前線に送り、それでも成長したら、また別の人間を幼児化させるつもりだったんだろーぜ」

まったく、思い返しても腹が立つ。なぜあんな冷酷非道な奴を、サグルは父親として尊敬していたのか、謎だ。

まあ、意趣返しはしてやった。彼は知らなかったのだ。薬の調合を依頼したシンイチに、シホが条件を出したことを。

『これ一度きりよ。もう二度と、こんな薬は作らない』

古くから、病気などに苦しむ人たちのために一家が培^{つちか}ってきた知識と技術を、そんな目的に使いたくはないと。

「元に戻るつもりがなかったなら、どうするつもりだったの?」

そう尋ねるエリの顔は、もはや為政者のそれではない。娘の友人を心配する、母親の顔だった。

「……そこまで、コイツに聞かせる気か?言ったら、傷つけるって」「どこで聞こうと、同じ事よ。それに、この子はそれほど弱くはないわ」「

言いながら、娘に目を向ける。それに気付いたランは、不安そうに揺れる瞳を母に返した。

それを横目で見る、コナン。

こういう顔をさせたくなくて、何も話さなかったのに。

「……ランの身の安全を確認したら、この近辺から姿を消し、どこか適当な家に拾われるつもりだったよ。今度は、本当の孤児として」

そして、決して会うことのない遠くから、ランを守るつもりだった……とは口には出さない。

話したくなかった。自分のために幼馴染みが家族を捨て、名を捨て、自ら孤児になったら、ランはきつと傷つき、苦しむ。かといって、何も話さず、他人として側に居続けても、やはりランは『コナン』を心配して心を痛める。　　間諜である『コナン』は、側にいればランを傷つける存在でしかないのだ。

そんなコナンの心中を読んだのか、目を細めて考えこんでいたエリは、一つ息をついた。

「よく、わかったわ」

47：あの時の言葉

エリの言葉に、コナンはようやく顔を緩めた。

「あなたの処分は、情勢が落ち着いてから決めるわね。悪いけど、今はあなただけに構ってられないわ」

3人はそれぞれの反応をした。ランは落ち着いてきた表情を曇らせ、ホーシは角ばった肩をおろし、コナンは にっこりと笑った。「大丈夫。混乱はあまり長くは続かないはずだよ。父さんがここまです時間をかけたのは、この後の事を考えて、手を打ってたんだろから。」

オレは、話すことは全部話したし……任せるよ」

その笑顔は、あの頃 本当の家族のように暮らしていた頃の笑顔に、ランには見えた。

その驚きを誤解したのか、不意にランに目を移したコナンは、またゆるく笑った。

「心配してんのか？母親を信用しろよ……ラン」

「！」

それは、シンイチとして初めて、ランにかけてた言葉だった。

「お母さん、手錠だけでも外せない？」

「必要ないよ」

部屋を出て行くこうとするエリにかけてたランの声に返事したのは、コナンだった。

「今更逃げる気もないし、食・住世話してもらおうからさ」

「……………」

エリとホーシが出て行くと、ランは息をつき、苦笑した。

「ずっと、考えてたよ。コナン君が言ってた、『最初からそのつもりだった』って言葉」

「ああ」

ランに、詳しいことは話せない。だからあえて、抽象的な言葉にとどめたのだが、逆に謎にしまった。

……あれは、両方とも本当だった。

『コナン』として最初にランを裏切ったのは、予定の行動。そして、その後ランを守って『仲間』を裏切ったのもまた、予定の行動だった。本当の狙いは後者だった訳だが。

ランは不意に表情を曇らせ、コナンの手錠に手を置いた。

「……ごめんね」

「何が？」

「私のために、辛いことしてきたんでしょ？」

コナンは目を閉じた。……こいつは、本当に変わらない。

「オレが、勝手にやったんだよ」

勝手に想い続けて、勝手に怒って、勝手に決意しただけ。そして、勝手に諦めようとしただけ。

『あいつなら、アキトなら、ランの側にいてやれる』

本人の気持ちに、気付いていたくせに。側にいるのが辛くて、逃げようとしただけ。

『側にいるよ』

あの言葉は、嘘じゃない。願いだっただ。でも、そう願いながら、逃げようとしていた。

こんな姿になった自分を、見られたくなくて。

「……大丈夫だよ。悪いようにはしないさ。エリさんは、もうわかっている」

「何に……？」

「オレが、すでに罰を受けてるってことを」

ランは不思議そうな顔をしたが、コナンはそれ以上、話すことはなかった。

47：あの時の言葉（後書き）

前の話を見返してみても、張った伏線に気付くことが最近あります。
いやもう、すっかり忘れてた・・・。

全く予期してなかったんですが、うまくいけばキリよく50話で終われる・・・かも。

という訳で、ラストまでもう少しお付き合い下さいませ。

48：処分決定

コナンの言葉は、現実になった。

独裁者が座を追われ、半年は続くと思われた混乱は、1か月たらずで収束した。

その要因は、中途半端に放置状態になった権力・地位 諸々（もろもろ）を見事に駆使し、次々と対応策を打ち出した新主席・シユウ。彼こそ、ユーサクが打っておいた『手』そのものだった。

コナン自身でさえ、ここまででは予想していなかった。

あの対話から1か月後、エリはランを連れ、ホーシを従え、コナンをつないでいる部屋を訪れた。

「処分が決まったわ」

そして、懐からあの薬を出す。

「まず、飲みなさい。『あなた』にするべき話だから」

「……いいの？ やったのは全て、『コナン』だよ」

「いいのよ。『コナン君』ではできないことだろうから」

「……」

コナンは目を細めたが、それ以上は言わず、受け取った薬を口に入れた。

「どのくらいで、効果が出るのかしら？」

「多分、10分ぐらい。前に飲んだのと、作用は同じメカニズムのはずだから」

どの言葉通り、10分ほどがたった時。

「……っ！」

コナンの顔が歪んだことで、その時が来たのだと察する一同。

「……く……っ……っ……っ！」

体を二つ折りにして、それでも鼓動の高まりに耐え切れず、横た

わるコナン。

1分ほど、そうしていただろうか。もがくコナンの手足に違和感を感じたのも束の間、次の瞬間。

「……ふう」

汗だくになって大きく息をついたのは、もはやコナンではなかった。

「……シンイチ」

シンイチは息を切らせながら、笑みを浮かべ、小さく言った。

「……サンキユ」

それは、もう二度と会うことのないかもしれない、友人への言葉。誰にも聞かれることのない、聞かれる必要のない、感謝の言葉だった。

「大丈夫？」

さすがにエリが気遣い、声をかける。それにうなずいたシンイチは、汗を手の甲で軽くぬぐい、

「じゃ、聞かせてもらいますか。オレの処分を」

エリはうなずくと、気を取り直した。

「あなたは娘を利用して施政館に潜入し、情報を流し、わが国に多大なる不利益を与えました」

口を挟もうとしたランを目で制したエリは、今度は優しい口調で続けた。

「しかし、あなたは娘に対する姦計かんけいをいち早く察知し、娘を命がけで守ってくれました。この国の長として、またランの母として、謝意を表します。」

あなたを、わがコーリ国の正式な国民として、再び迎えましょう」
シンイチとランの目が、見開いた。

「……それは」

言葉が続かないシンイチに、顔全体をゆるめるエリ。

「前に聞いた話から察すると、あなたが幼児化した時点で、あなたの戸籍は抹消されているんじゃないかしら。ということは、こちらで戸籍を用意しても、何ら問題はないわね？」

シンイチを元に戻す気がないなら、『シンイチ』の戸籍は無意味しかも、いつでも身に危険が迫りうる任務ばかりさせるつもりだったなら、『コナン』としての戸籍も、ない方が都合がいい。

ふたりは、心中呟いた。……スルドイ。確かにその通りだが、そこまで気づくか普通。

エリの傍らで控えているホーシさえ、数日前にその可能性を聞かされたときは仰天したものだ。

シンイチは、ため息でそれを表した。

「それでいいんですか？ 相当な被害をこうむったのに」

「あら、誰が？」

少し冗談めかして返すエリに、シンイチはまた一つ、事実を見抜かれていたことを悟った。

「……気付いてたんですか」

「え？」

困惑気味の声は、ランのもの。

「コーサクさん、アライ主席を弾劾したとき、同時にあなたが流した情報を消去したんでしょう」

ホーシがびくりと反応すると同時に、ランが面食らう。

「どうして、そんなことわかるの？」

「そうでなければ、今頃コーリまで大混乱よ。国家機密が数ヶ月の間、漏洩（もつてい）してたんだから。彼の裏組織の物証がそろっていたなら、尚更表ざたになるはずだわ。そうよね？ シンイチ君」

「……そうですよ。コーリへ来る前に、父さんと決めておいたんだ、影響を無駄に広げないためにね。でもさつき、多大な不利益を……」

「ああ、それは内部調査に費やした時間と労力の話。……つまり、今回の件はまったく世間に知られていないという事よ。だから、必ずしもあなたを罰する必要もないの。……わかる？」

「……」
一応、理屈は通っている。どこかが間違っているように聞こえないでもないが。

「……それに」

エリは、母親の顔になった。ランをちらっと見てからシンイチに視線を戻し、続ける。

「あなたは何より辛く苦しいことを、もうすでにしてきたでしょう？」

シンイチは、その意味を悟って苦笑した。が、ランは合点がいかないらしい。

「それ、シンイチが言った罰のこと？…どういうこと？」

「一番大切な人を、その手で騙し、欺き、傷つけるのは、どんな刑罰を受けるよりも、痛いことじゃない？」

ランははっとした。

「彼が未だに謝らないのも、そのせいじゃないかしら？」

と言って、ランに向けていた目をシンイチに向けるエリ。

そう。シンイチがした『任務』への償いは　その『任務』自体。

ランに敵として近づいた事実。ランについた嘘。そして施政館を利用した、その罪。

その全て　『コナン』としてした全ては、誰よりシンイチの心を蝕んだ。彼自身、傷つき続けていた。

ランが流した涙よりもなお深い、傷を。

そして、シンイチは未だに、誰にも謝罪していない。

それは、許されるつもりがないから。自分で自分を、許していないから。

謝れば、ランたちはシンイチを許すだろう。だから、謝らない。

それもまた、シンイチなりの贖罪。

エリは続けた。

「私からあなたに要求することは、ただ一つ。もう二度と、ランを傷つけたりしないことよ。……約束してくれるかしら？」

シンイチは、一瞬泣きそうな顔をして エリにはそう見えた、
微笑んだ。

「ええ、必ず」

それは他でもない、自分自身に課した、ややくじ約定なのだから。

49：償い（後書き）

えらくセンチな内容になってもーた・・・。

えーっと、あと1話で色々まとめ終わる予定です。

総アクセス数が早くも21,000突破！ありがたい限りです。
よろしければ、感想など送ってやって下さい。

50：最後の再会（プレゼント）

「やっぱり、あんたはランさんが好きだったんだな」

事情を説明されたアキトは、はじめこそ幼児化という現象に仰天していたが、訳を飲み込むと、訳知り顔でうなずいた。

「お前には、一度も嘘をつけなかったな」

シンイチが苦笑する。多分、自分のランへの気持ちを一歩早く、はつきり気付いていたのは彼だろう。

「…それで、同じ高校に通うことになったわけか」

突然、憂鬱そうになるアキト。

「そついう事だな。よろしくな、……恋敵さん」

最後の一言は、ランに聞こえないようにつぶやく。アキトはむくれた。

「ライバルだつて……よく言うよ」

話をしてくれたときのランの喜びようを見れば、彼女の気持ちはわかる。はつきり言って、不戦敗の気分だ。

それでも、シンイチを憎いとか、恨めしいとか思えないのは、彼というランの嬉しそうな顔に、自分まで癒されているからだろうか、とアキトは思った。

「わかんねえよ、んなこと。人の心ほど不可解なものは、そうはねえからな」

少し前までは、ランと一緒にいることを選ぶなんて、まったく思っていなかった。人の心というものは、何がきっかけで変わるかわからない。

「……」

アキトは、少し顔つきを変えてシンイチを見た。

羨ましさ、悔しさ、そして、嬉しさ、誇らしさ……そんな色々な

感情が混ざったような、顔。

「それで？あの人は、いつ到着するの？」

前を歩くランが振り返る。シンイチは腕時計を見た。コナンだった時からの、数少ない携行品だ。

「……3時間後だな、エリさんに来いって言われてるのは」

「そっか。……懐かしいなあ。シンイチも待ち遠しいでしょ」

いたずらっぽい笑顔を向けられ、いつもならむくれて否定するシンイチは、かすかに笑うとうなずいた。

つられたように優しく笑うラン。

本当に、また会えるなんて、また暮らせるなんて、思っていなかったから。

あの『約束』の後、シンイチは一つ、エリに頼みごとをした。

父であるユーサクを、自分と同じように、コリーに受け入れてほしい、と。

『ランの危機を1番早く予測し、オレを差し向けたのは父さんなんだ。あの男の罪を暴き、ランの身の安全を確保したのも。歓迎される資格は、十分にあり』

そう頼んだシンイチに、エリはうなずいた。

「そうね……ユキコもきつと、そう望んだはずだわ」

新しい政権誕生の、陰の立役者だ。悪いようにはするまい。新政府に密かに申し入れてみると、あっさり承諾された。そして今日が、到着の日。

館に着くと、話を通してあったミドリが、奥の部屋に3人を案内した。

さして広くもない部屋だが、人が5人入るには十分だった。そして、そこにはすでに2人の人間がいた。

「時間通りね、シンイチ君」

振り向いたエリの奥にいたのは。

「…久しぶりだな、シンイチ」

「……父さん」

もう二度と、会うことはないと思っていた、父。

シンイチはほんの少し、言葉を失っていたが、すぐに表情を取り戻した。

「……ああ、久しぶり」

それはもう、いつもの彼の笑顔で。ランは隣で見ている、嬉しくなった。

「お疲れ様でしたね。住まいを用意してますから」

「ありがとうございます。しかし、それは無用ですよ。自分の家は自分で探します。なあシンイチ」

かつて住んでいた家は引き払って、すでに他人の物になっている。それをエリは氣遣ったのだ。ちなみにシンイチは現在、引き続き館に滞在している。

「ん？……ああ」

「なんだ？彼女と同じ家に住めなくなるのが寂しいか？」

「んなわけあるかつ！」

いきなり話を向けられてきた空白をからかう父に、シンイチは少し赤くなって、あらぬ方向に目をそらした。

50・最後の再会（プレゼント）（後書き）

すいません、1話で終わらせる予定だったんですが……。入れておきたい要素が意外に多かったです。

ユースクさん、出せてよかったー！実はこの回書き始めるまで、出そうかどうか迷ったんですが。やっぱりチョロっとぐらいは出ないとね。

この回のタイトルが1番迷いました。何とか英語か熟語で考えてたんですが、どーも「コレ！」ってというのがなくて。後で変更する可能性大アリです。

51・繋いだ手(前書き)

後書き長いです。そして、ちょっとしたお知らせがあります。

51：繋いだ手

奇跡は、続くものらしい。

劇的な主席交代という奇跡は、新たな奇跡を生んだ。

シウウ新主席は政策の一つとして、約8年間絶たれていた、コーリをはじめとした諸国との国交を回復させた。まだ混乱さめやらぬ状態だが、もう少し落ち着けば、いずれ自由にシャナンに行けるし、来られるようになるだろう。

それを知ったシンイチは、

「なんだ。ちょっと待ってれば、父さんも勝手に、こっちに戻ってこられたんじゃないか」なんて、ぶつくさ言ったが。

そのニュースには、今回の関係者も、様々な感想をもらした。

例えば、

「あん時間きそこねたアイツの事情、押しかけて説明さしたるか。ついでに、あの姫との事もからかってやったら、おもしろうやな」とか。

例えば、

「あの薬、ちゃんと問題なく作用したかどうか。確かめてみようかしら。ついでに、色々検査もして、例の彼女を一目見てみるのも、悪くないわね」とか。

そして

裏組織の存在を暴露され、表舞台から姿を消したアライは、一族そろって田舎に引っ越した。彼が再び政治の舞台にたつかどうかは、定かではない。時が……もしくは人々が、決めることだろう。

「ほら、行くぞ」

登校途中、シンイチは立ち止まると、ランに手を差し出した。

一瞬、目を丸くしたランだが、すぐに笑顔に戻ると、その手を取り、シンイチに続いた。

この繋いだ手を、もう離すことのないように。
願いはいつでも、ここにあるから。

51：繋いだ手（後書き）

今になって、「抽象的なタイトルにしてよかった〜！」とほっとしてます（笑）。もう、タイトルが繋がっただけでちょっと満足。

ただ、一つ「失敗したなあ」と思う事があります。

というのも、後半が始まる頃までは、コナンがランをどう思っているのか、はっきりとはわからないようにするつもりだったのが・・・書いてみたら、そんな予定どこ吹く風。ありやいや。

遅くなりましたが、評価・感想を下さった方々、ありがとうございました。もちろん、今後もお待ちしております。

と、ここでちょっとお知らせしておきたい事がありました。

今、もう一つ連載をしてるんですが、それを終わらせたら、少し投稿を休もうと思います。別に作者やめるとかいう事ではありません。今まで、パソコンに向かうのなんて週1ぐらいだったのに、小説書き始めてから毎日やるようになって、ちょっと減らそうかなあ、というだけの話です。

それに、自分で小説書くようになって、どうも今までと感覚が変わってきたんです。純粹に読書を楽しめなくなった、というか・・・すみません、うまく言えません。

とりあえずは、もう一方の連載をがんばりますので、そっちもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8026c/>

繋（つな）いだ手 ~ my hope , your heart ~

2010年10月8日12時52分発行